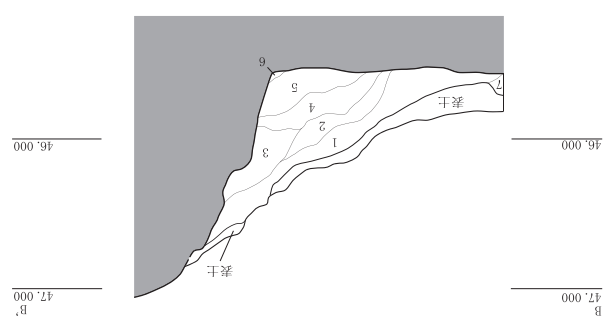
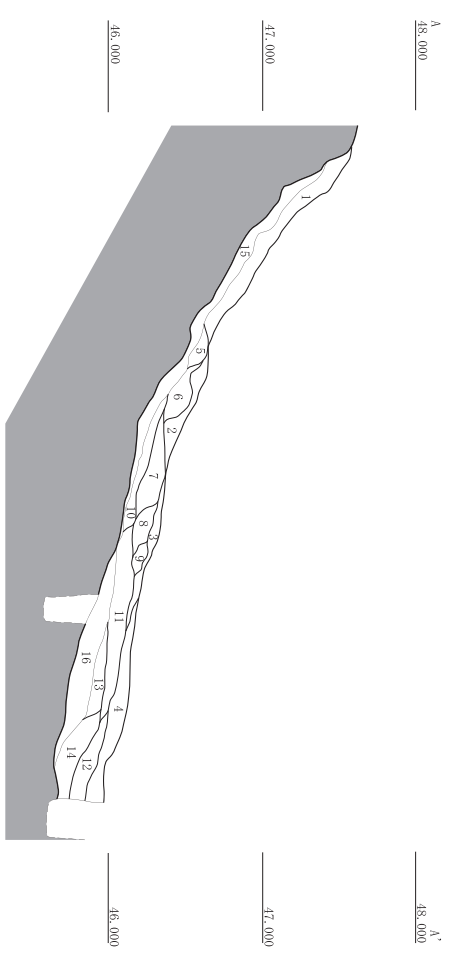
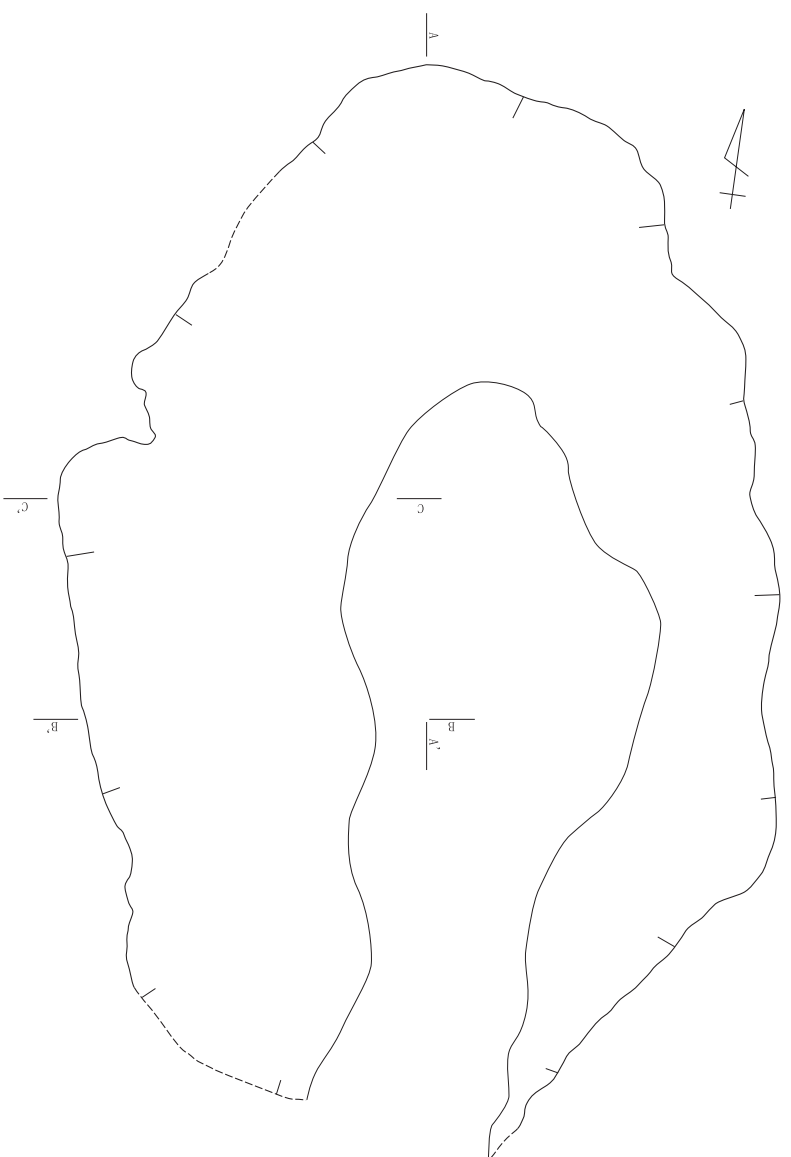




- 【盗掘坑北側サトレス子 土層】
- 1 灰白色土
 - 2 淡褐色土
 - 3 淡黄褐色土 (明赤色粘土・アロクを含む)
 - 4 褐色土
 - 5 黄褐色土
 - 6 明赤褐色土
 - 7 明赤褐色土
 - 8 暗黄褐色土 (明赤色粘土・灰黒色土・アロクを含む)
 - 9 暗黄褐色土
 - 10 灰黄褐色土
 - 11 明赤褐色土 (11層より明度低い)
 - 12 明赤褐色土
 - 13 明赤褐色土



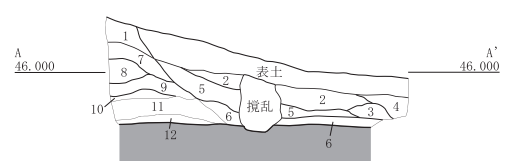
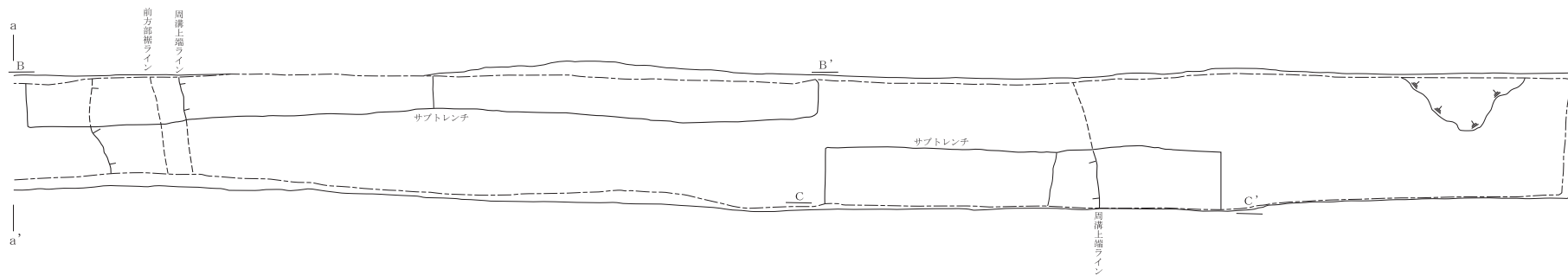
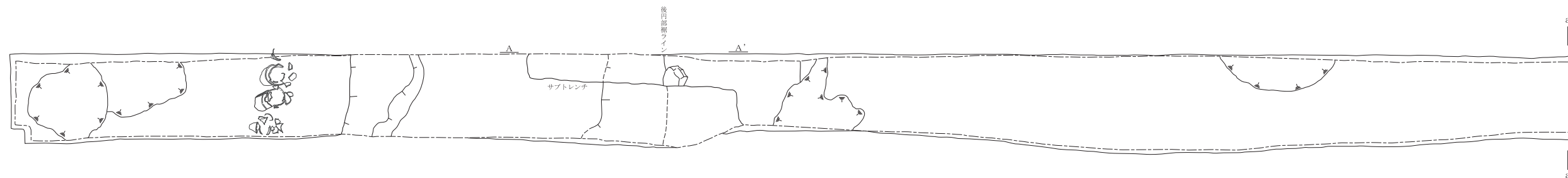
- 【盗掘坑南側サトレス子 土層】
- 1 明赤褐色土 (しまり弱い)
 - 2 暗赤褐色砂 (しまり弱い)
 - 3 暗赤褐色砂 (しまり弱い)
 - 4 暗褐色細砂 (しまり弱い、黒色有機物を少量含む)
 - 5 暗褐色細砂 (4層より明度低い)
 - 6 明赤褐色土
 - 7 暗黄褐色土



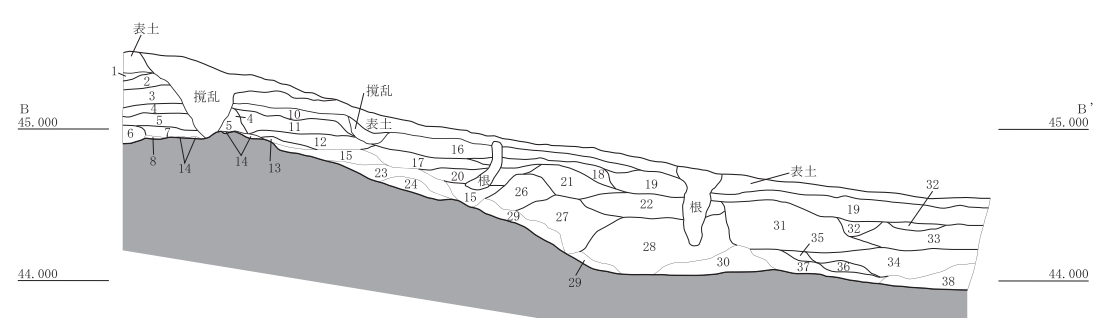
- 【盗掘坑南側土層】
- 1 暗褐色土
 - 2 暗黄褐色土
 - 3 黄褐色土
 - 4 明赤褐色土 (暗赤土)
 - 5 明赤褐色土 (暗赤土)
 - 6 暗黄褐色土
 - 7 暗黄褐色土 (7層より明度低い)
 - 8 暗黄褐色土
 - 9 明赤褐色土
 - 10 暗赤褐色土
 - 11 暗褐色土
 - 12 暗褐色土 (11層より明度低い)
 - 13 暗褐色土
 - 14 暗褐色土
 - 15 暗褐色土
 - 16 暗赤褐色土



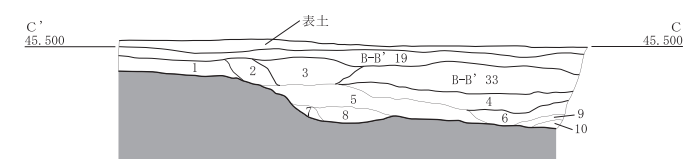
第6図 盗掘坑実測図・土層図 (S=1/50)



- 【Tr1 A-A' 土層】
- 1 灰黒色土—表土
 - 2 暗黄褐色土
 - 3 黒褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 灰黒色土
 - 6 暗灰黄色土
 - 7 暗黄褐色土
 - 8 暗黄褐色土
 - 9 灰色土
 - 10 明赤褐色土
 - 11 暗灰黄褐色土
 - 12 注記漏れのため不明



- 【Tr1 B-B' 土層】
- | | | | |
|-----------------------|----------------------|--------------------------|----------------------|
| 1 褐色土 | 11 黄褐色土 (しまり強い) | 21 灰黄色土 | 31 暗黄褐色土 |
| 2 灰色土 (しまり弱い) | 12 灰褐色土 | 22 淡灰色土 *21・22は人為的埋土の可能性 | 32 灰黒色土 |
| 3 淡赤褐色土 (しまり強い) | 13 淡灰黒色土 | 23 明赤褐色土 | 33 黒褐色土 |
| 4 明黄褐色土 (しまり強い、粒子細かい) | 14 灰黒色土—旧地表 | 24 黄赤褐色土 | 34 暗褐色土 |
| 5 明黄褐色土 (しまり強い) | 15 明黄褐色土 | 25 暗赤褐色土 | 35 暗黄褐色土 (31層より明度低い) |
| 6 灰黒色土 (しまり極めて強い) | 16 暗黄褐色土 | 26 灰黄色土 (21層より黄味強い) | 36 暗褐色土+明黄褐色土 |
| 7 暗黄褐色土+淡灰黒色土 | 17 黄褐色土 | 27 濃黄褐色土 | 37 明黄褐色土 |
| 8 灰黒色土 (しまり強い) 旧地表 | 18 暗黄褐色土 (16層より明度低い) | 28 淡灰黒色土+濃黄褐色土 | 38 暗灰黒色土 |
| 9 欠番 | 19 黄褐色土 | | |
| 10 明灰黄色砂質土 (しまり強い) | 20 濃黄褐色土 | | |



- 【Tr1 C-C' 土層】
- 1 淡灰黒色土—旧地表
 - 2 灰黒色土
 - 3 灰黒色土
 - 4 暗黄褐色土
 - 5 明褐色土
 - 6 明黄褐色土
 - 7 明赤褐色土
 - 8 明灰色土
 - 9 明黄褐色土
 - 10 黄白色土

第7図 トレンチ1実測図・土層図 (S=1/50)

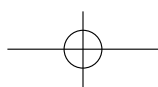
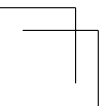
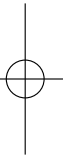
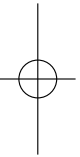
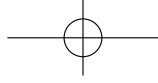
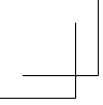
横隈山古墳

－福岡県小郡市三沢所在横隈山古墳の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第 289 集

2015

小郡市教育委員会



序文

本書は、小郡市教育委員会が重要遺跡確認調査として実施した横隈山古墳発掘調査の報告書です。

本書に収録されている横隈山古墳は、昭和48年の宅地造成が行なわれた際に住民運動によって保存されたために、現在もその姿を見ることができる貴重な文化財です。小郡市にはこの横隈山古墳をはじめ、津古1号墳や花立山穴観音古墳などの前方後円墳が保存されています。その一方で開発によって失われた古墳も多くあり、その姿は報告書や写真でしか見ることはできません。

今回の調査によって、横隈山古墳の規模、古墳周囲に周溝がめぐること、墳丘上には埴輪列が並ぶことなどが明らかとなりました。一部の調査ではありましたが、これらの成果が地域の歴史、文化財に対する理解、教育及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、2カ年にわたる長期の調査にもかかわらず、ご理解とご協力を頂いた周辺住民の皆様、そして、現地作業に当たった地元作業員の皆様、発掘調査を進めるうえでお世話になった多くの方がたに感謝を申し上げ、序文といたします。

平成27年3月31日

小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例言

1. 本書は、福岡県小郡市三国が丘7丁目242番地に所在する横隈山古墳発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、重要遺跡確認調査によって小郡市教育委員会が行なった。
3. 遺構の実測は龍孝明が中心に行ない、坂井貴志、田中賢治、西初代、岩原春代、阿南翔悟の協力を得た。製図は上田恵が行なった。
4. 測量に伴う4級基準点の設置は有限会社エイワンに委託した。
5. 遺構の写真撮影は龍が行なった。
6. 遺物の写真撮影は、有限会社システム・レコに委託した。
7. 遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は世界測地系第Ⅱ系に則っている。
8. 本書に収録している遺物、実測図、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
9. 本書の執筆は杉本岳史、山崎頼人、上田の協力を得て龍が行なった。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の経過	
3. 調査の組織	
第2章 位置と環境	4
第3章 調査の概要	8
第4章 遺構と遺物	8
1. 古墳	
1) 盗掘坑	
2) トレンチ	
3) 出土遺物	
第5章 まとめ	39
1. 墳丘について	
2. 埴輪について	
3. 築造時期について	
4. 横隈山古墳の性格について	

挿図目次

第1図	昭和48年周辺地形測量図 (S=1/400)	1
第2図	土砂災害警戒区域図 (S=1/1,000)	2
第3図	横隈山古墳位置図 (S=1/10,000)	5
第4図	周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)	7
第5図	横隈山古墳トレンチ位置図 (S=1/300)	9
第6図	盗掘坑実測図・土層図 (S=1/50)	10・11
第7図	トレンチ1実測図・土層図 (S=1/50)	12・13
第8図	横隈山古墳埴輪列実測図 (S=1/10)	15
第9図	トレンチ2実測図・土層図 (S=1/50)	16
第10図	トレンチ3実測図・土層図 (S=1/50)	17
第11図	トレンチ4実測図・土層図 (S=1/50)	18
第12図	トレンチ5実測図・土層図 (S=1/50)	19
第13図	トレンチ6実測図 (S=1/50)	20
第14図	トレンチ7実測図・土層図 (S=1/50)	22
第15図	トレンチ8実測図・土層図 (S=1/50)	23
第16図	トレンチ10実測図・土層図 (S=1/50)	24
第17図	トレンチ11・12実測図 (S=1/50)	25
第18図	横隈山古墳出土円筒埴輪実測図① (S=1/4)	31
第19図	横隈山古墳出土円筒埴輪実測図② (S=1/4)	32
第20図	横隈山古墳出土円筒埴輪実測図③ (S=1/4)	33
第21図	横隈山古墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (S=1/4)	34
第22図	横隈山古墳出土家形埴輪実測図 (S=1/4)	35
第23図	横隈山古墳出土蓋形埴輪実測図 (S=1/4)	36
第24図	横隈山古墳出土盾形埴輪実測図 (S=1/4)	37
第25図	横隈山古墳出土不明形象・器財埴輪・土器実測図 (S=1/4)	38
第26図	横隈山古墳墳丘復元図 (S=1/300)	40
第27図	横隈山古墳埴輪列復元図 (S=1/300)	43

表目次

第1表 出土埴輪・土器観察表

図版目次

図版1①	横隈山古墳遠景 (北東上空から)
②	横隈山古墳遠景 (東上空から)
図版2①	横隈山古墳全景 (南西から)
②	後円部墳頂から前方部 (南から)
③	後円部墳頂埴輪列 (北西から)
④	後円部墳頂埴輪列 (北から)
図版3①	盗掘坑全景 (南から)
②	盗掘坑南北トレンチ (南西から)

- ③ 北側サブトレンチ土層（北から）
④ 南側サブトレンチ土層（北から）
- 図版4 ① トレンチ1 全景（北から）
② トレンチ1 後円部全景（北から）
③ トレンチ1 後円部裾サブトレンチ土層（北東から）
④ トレンチ1 前方部裾サブトレンチ土層（北東から）
⑤ トレンチ1 周溝部（北から）
⑥ トレンチ1 周溝端（北西から）
- 図版5 ① トレンチ2 全景（西から）
② トレンチ2 全景（東から）
③ トレンチ2 後円部裾土層（北から）
④ トレンチ2 周溝部土層（北から）
- 図版6 ① トレンチ3 全景（南西から）
② トレンチ3 後円部土層（東から）
③ トレンチ3 土坑状遺構土層（東から）
④ トレンチ4 全景（東から）
⑤ トレンチ4 土層（南から）
⑥ トレンチ4 前方部裾土層（南から）
- 図版7 ① トレンチ5 全景（北から）
② トレンチ5 土層（北から）
③ トレンチ5 土層（西から）
④ トレンチ5 拡張部（西から）
⑤ トレンチ5 拡張部（東から）
- 図版8 ① トレンチ6 全景（北東から）
② トレンチ6 拡張部（北西から）
③ トレンチ7 全景（北東から）
④ トレンチ7 土層（北西から）
- 図版9 ① トレンチ8 全景（北西から）
② トレンチ8 土層（北から）
③ トレンチ8 延長部全景（南東から）
④ トレンチ8 延長部土層（北東から）
⑤ トレンチ8 - 2 全景（北西から）
⑥ トレンチ8 拡張部（南から）
- 図版10
① トレンチ10 全景（南から）
② トレンチ10 土層（南西から）
③ トレンチ10 攪乱土層（南西から）
④ トレンチ10 周溝部土層（西から）
- 図版11 出土遺物①
図版12 出土遺物②
図版13 出土遺物③
図版14 出土遺物④
図版15 出土遺物⑤

第1章 調査の経緯と経過

1. 調査にいたる経緯

横隈山古墳は、昭和48年に行なわれた宅地造成に伴い、横隈山遺跡群の発掘調査前に実施された伐採作業中に確認された前方後円墳である。横隈山遺跡群は、横隈山遺跡調査団のメンバーであった久保山教善氏によって、後期旧石器時代や弥生時代の遺物が採集されており、昭和30年代にはすでにその存在が知られていた。発掘調査によって明らかとなった遺跡の内容は大きな関心をもたれ、市民による保存運動の機運が高まり、横隈山公園、横隈山古墳公園として横隈山遺跡群の一部が保存されることとなった。横隈山古墳は発見時にはすでに後円部南側に盗掘を受けており、「周辺によくある石材を目的とした盗掘によるものだとすれば、主体部の墓坑の掘り方をはじめ、内蔵する遺構、遺物には大きな関心をもたれる（横隈山遺跡 1973）」として、復元を前提とした調査が要請されている。

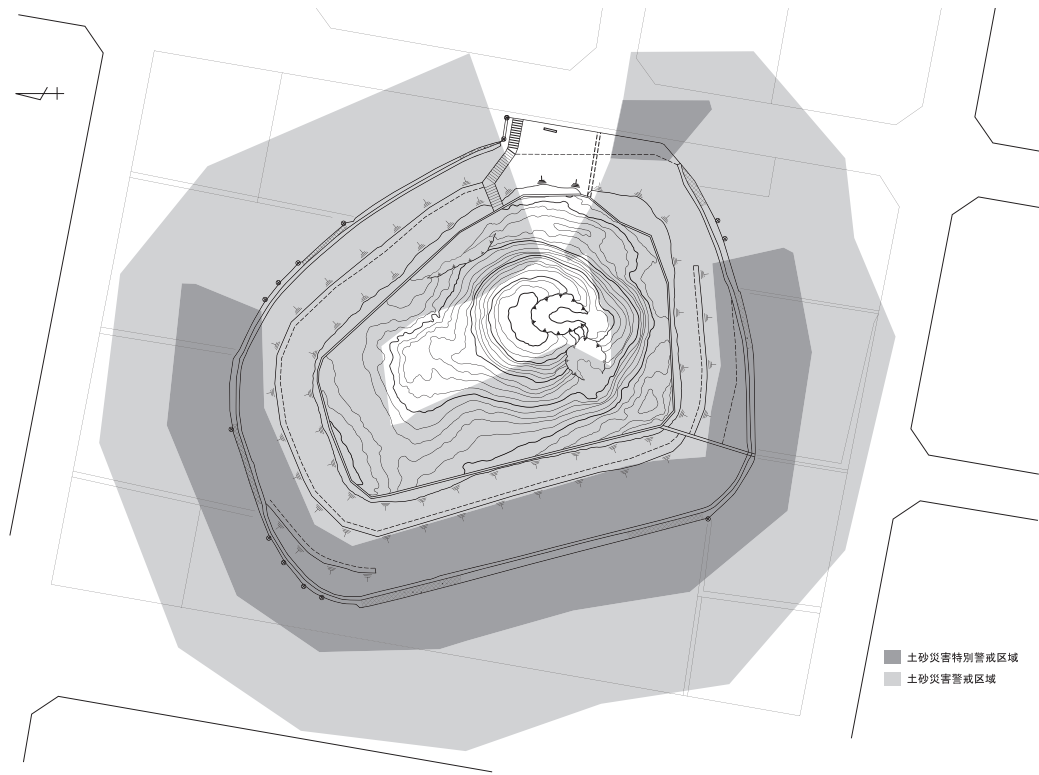
市民運動によって保存された横隈山古墳公園であるが、平成24年度に「土砂災害防止法」に基づいた「傾斜角度30度以上、地上5m以上の基準」により、公園西側斜面は「土砂災害特別警戒区域」に、その他全域は「土砂災害警戒区域」に指定（平成24年4月1日）されることとなった（第2図）。これに伴って、小郡市都市建設部都市計画課の所管であった横隈山古墳公園は、保存整備の必要性に迫られたこともあり、小郡市教育委員会文化財課へ移管されることとなった。

そこで、小郡市教育委員会では横隈山古墳の詳細な墳丘形態、規模、付随施設を明らかにし、墳丘の保護と保全、公園の整備、周辺環境の維持と周辺住民への安全対策を図るため、詳細な記録と保存を行う目的で横隈山古墳の詳細墳丘測量および発掘調査を実施する運びとなった。

調査対象地の面積は1,308㎡である。発掘調査は事前に福岡県教育委員会と協議を行ない、結果、トレンチ調査と最低限の面的な調査による墳丘規模の確認を実施することとした。重要遺跡確認調査として小郡市教育委員会が事業主体となり、国の補助を受け、平成24年12月5日から平成25年9月13日まで調査を実施した。



第1図 昭和48年作成横隈山古墳測量図 (S=1/400)



第2図 土砂災害警戒区域図 (S=1/1,000)

2. 調査の経過

平成 24 年度に実施した調査を第 1 次調査、平成 25 年度に実施した補足調査を第 2 次調査とし、以下調査の成果を記す。調査方法は、墳丘上および周辺部にトレンチを設定し、人力で表土剥ぎ、覆土掘削を実施した。調査開始時は、墳丘上に雑草と雑木が生い茂っていたため雑木、雑草の伐採を実施した。トレンチ掘削中も木の根の除去などに調査日程の大半を費やす結果となった。

平成 24 年度（第 1 次調査）は、横隈山古墳の基礎資料として、墳丘の詳細測量図を作成することから開始した。昭和 48 年の横隈山遺跡調査時に横隈山遺跡調査団によって、測量図（第 1 図）が作成されている。往時の横隈山古墳の形状、周辺地形と古墳立地の関係性を確認できる好資料となっている。しかしながら、図面作成時からすでに 40 年以上が経過しており、現況とは異なる部分も生じていると考え、再度詳細な測量調査を実施し、現況での墳丘規模と墳丘形態、攪乱箇所を確認した。この結果、墳丘の形状が推定され、前方部付近に帯状に広がる窪みが確認でき、周溝の可能性を考え、調査対象とすることとした。

福岡県教育委員会との協議の結果、出土遺物の取り上げは必要最小限とし、原位置を保っていると判断した遺物については取り上げを行わないこととした。トレンチは縮尺 1/20 で平面図および土層図を作成し、併せて写真による記録撮影を実施した。

各トレンチの位置情報は光波による座標で記録していた。しかし、整理時に平成 24 年度調査分の座標値を記したメモを紛失してしまっている。調査期間中には座標値からトレンチ位置図を作成していたため、第 5 図に示したトレンチ位置はこれを利用し、平成 25 年度調査トレンチを配置したものである。

第 1 次調査（平成 24 年度）

- 11月19日 平板測量による詳細測量調査を開始。20cm コンタで等高線を回す。
- 11月20日 平板測量完了。
- 11月30日 測量図を基礎資料として福岡県教育委員会と小郡市教育委員会で協議を実施、調査は保存を前提とし、墳丘の断ち割り調査を行わないこと。埴輪列が確認された場合は、現状で保存すること等を確認した。
- 12月 5日 現地作業開始
- 12月 7日 トレンチ 1 の掘削を開始
- 12月14日 トレンチ 2、3、4 で墳丘盛土を確認。

- 12月20日 トレンチ1で周溝を確認。
- 1月9日 トレンチ1、2を墳頂部まで延長。墳頂部に埴輪列を確認。トレンチ7完掘。トレンチ2を延長。地山面と墳丘の関係を確認。
- 1月23日 小田富士雄先生調査指導、福岡県教育委員会吉田東明、岸本圭両氏現地視察。小郡市教育委員会で調査計画を再検討。
- 1月24日 田中正日子先生調査指導
- 1月31日 小郡市教育委員会で今後の調査方針について協議を実施。
平成24年度はトレンチ5、6を一部拡張し、周溝部の内側プランを確認すること。また、トレンチ8の北西側に面的な調査を実施し、周溝部の平面プランを確認することとした。盗掘坑および南西側については、土量が多く、調査に日数がかかるため現在の調査体制では困難であると判断し平成25年度に調査を実施することとした。
- 2月4日 トレンチ5・6・8を拡張し、周溝プランを確認。
- 2月8日 現場機材撤収。平成24年度調査完了
- 第2次調査（平成25年度）
- 7月16日 調査開始。トレンチ7、8を延長
- 7月17日 後円部墳頂に露出する埴輪片から円形にめぐる埴輪列が想定される
- 7月19日 トレンチ11で主体部を確認するため表土除去、掘削を開始
- 7月23日 調査内容検討のため福岡県教育委員会に写真・図面を送付。調査方針の指示を仰ぐ
- 7月25日 協議の結果、主体部の掘削は中止とし、当初の計画通りトレンチ10の掘削を行なうことを決定。
- 7月31日 トレンチ10を掘削開始。廃土はふるいにかけて内容物の精査を実施
- 8月8日 トレンチ7、8、10完掘。県教委坂元雄紀氏現地視察。調査範囲確認の指示を頂く
小郡市立三国中学校生徒が職場体験の一環として現場を見学
- 8月21日 トレンチ11掘削開始
- 8月29日 トレンチ1埴輪列、盗掘坑の埋め戻し。土嚢で養生を行なう
- 9月10日 トレンチ10を一部再掘削。墳丘盛土、盗掘痕跡を確認
- 9月12日 トレンチ10埋め戻し
- 9月13日 完全撤収、調査完了

3. 調査の組織

横隈山古墳の調査組織は以下のとおり。

【平成25年度】

小郡市教育委員会 教育長 清武 輝
 教育部長 佐藤秀行
 文化財課 課長 片岡宏二
 係長 柏原孝俊
 技師 龍 孝明

【平成26年度】

小郡市教育委員会 教育長 清武 輝
 教育部長 佐藤秀行
 文化財課 課長 片岡宏二
 係長 柏原孝俊
 技師 龍 孝明

〈発掘作業従事者〉

田中賢治、西初代、岩原春代、鈴木和志、高木雅樹、畠山重幸、阿南翔悟

末尾となりましたが、調査・整理作業の実施にあたっては、以下の方々からご指導、ご協力をいただきました。記して謝意を申し上げます。（敬称略・順不同）

小田富士雄、田中正日子、吉田東明、岸本圭、坂元雄紀、重藤輝行、小嶋篤

第2章 位置と環境

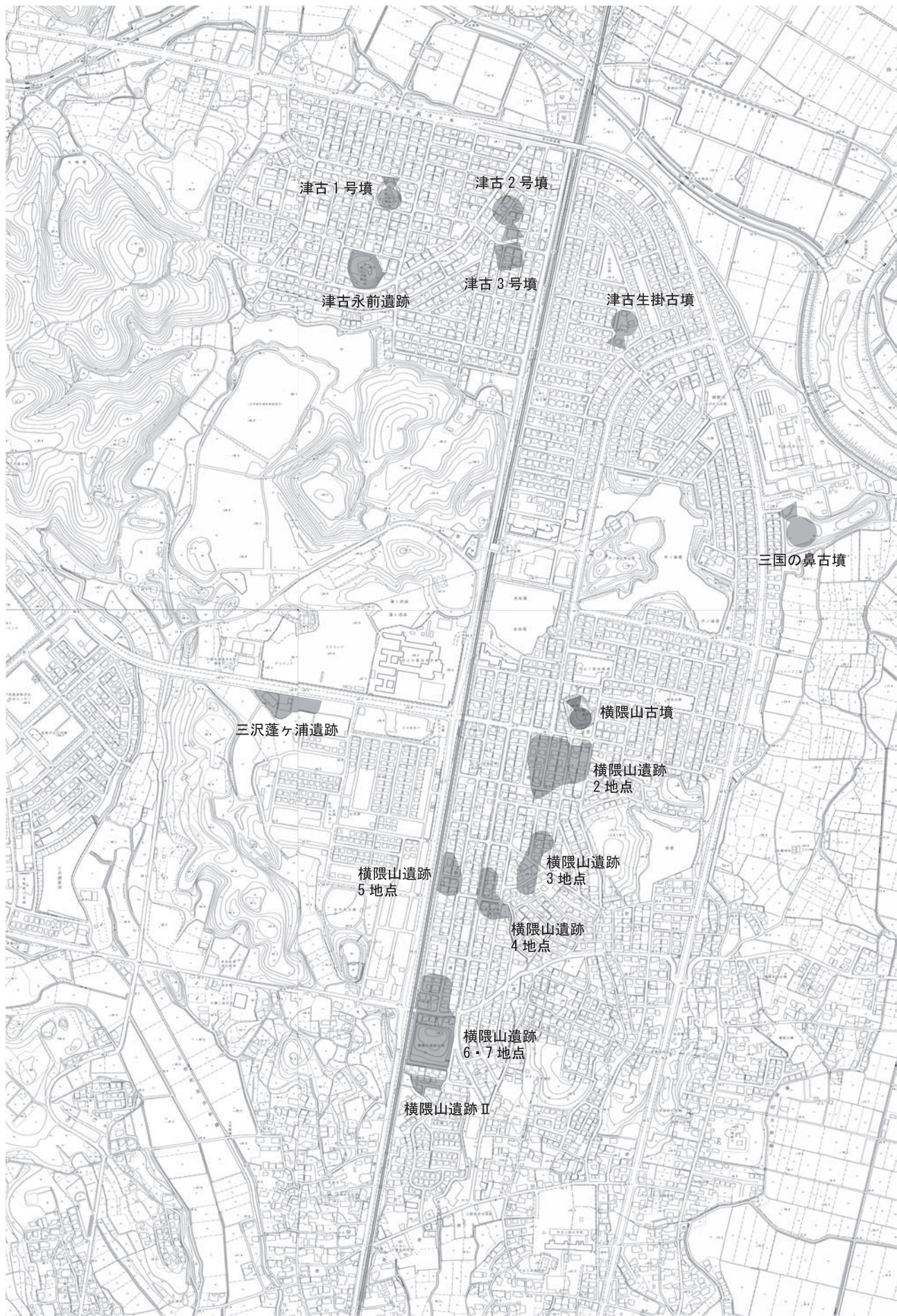
小郡市は福岡県の中部に位置し、北は筑紫野市、東は筑前町、大刀洗町、南は久留米市、西は佐賀県鳥栖市、基山町に囲まれている。市の南北を宝満川が貫流しており、南で筑後川に合流する。市の東部には市内最高所である標高 130.6 m の花立山がそびえる。宝満川の右岸、市北部には脊振山系からのびる花崗岩からなる舌状の低位段丘がのび、通称三国丘陵とよばれる丘陵地帯となっている。

この一帯は、小郡・筑紫野ニュータウン計画により大規模な開発に伴う大規模な発掘調査が実施され、特に弥生時代前期末から中期初頭、後期を中心に最も繁栄したところである。前期末から中期初頭のみくくの東遺跡、横隈山遺跡、横隈鍋倉遺跡、三国の鼻遺跡などでは多量の朝鮮系無文土器が出土しており、朝鮮半島との活発な交流を物語っている。

古墳時代前期には三国丘陵上に津古生掛古墳や津古1・2号墳、三国の鼻1号墳など古手の古墳が築造される。津古生掛古墳は3世紀後半段階の築造で全長 33m を測る。南側に長さ 5m ほどの突出部状の前方部が付属する。主体部は組合せ式木棺直葬である。副葬品は方格規矩文鏡1面、ガラス小玉、鉄剣、短冊形鉄斧、袋状鉄斧、類銅鍔定角式鉄鍔などが出土している。組合せ式木棺は半分ほど削平され、現存長で長さ 1m、幅 70～80cm を測る。津古生掛古墳から出土した土器は外来系の器種で占められている。また、津古生掛古墳の立地する丘陵末端部に位置する津古生掛遺跡 87号住居跡から同時期、同系統の土器がみられる点は、外来系土器の流入と初期の古墳築造とに明確な相関関係を見出せるものである。古墳築造に至った経緯が畿内や瀬戸内地域などの倭王権中枢との関係が権力掌握につながったものであることを示唆している。筑紫野市の隈・西小田遺跡群でもこの時期の古墳が数基確認されているが、主体部には割竹形木棺が採用されるなど小郡市側とは違いがみられることから、出自や格差による墓制の差が現れている可能性がある。

昭和 43 年に発掘調査が実施された津古2号墳は、全長 29m を測る前方後円墳である。築造時期は津古生掛古墳を遡ると考えられている。主体部は粘土槨の木棺直葬と考えられている。主体部からは刀子、小玉が出土したらしいが現地で盗難にあっている。周溝と墳丘裾からは小形丸底壺と小形器台のセットが出土している。津古生掛古墳や津古2号墳は筑紫野市原口古墳（全長 80m）と比べると、凌駕する規模ではないが、地域的な連合体制のなかでの中心的な存在といった位置づけがなされている。津古3号墳は2号墳の周溝をはさみ南側に接する一辺 14m の方墳である。津古2号墳の周溝を切っており、3号墳のほうが新しいようであるが、出土した土器からはほとんど時期差はみいだせず、ほぼ同時期の築造と考えられている。未調査のため主体部は不明である。周溝からは船が線刻された土器が出土している。この土器は壺の胴部上半に船および波と考えられる文様が描かれ、中央とその前後に帆と考えられる突起が描かれている。船は舳先の上がる外洋型の船と考えられている。内陸にありながら、当時から外洋への進出を活発に行ない、大陸との交流が密であったことをうかがわせる。このことは弥生時代前期から横隈鍋倉遺跡や横隈北田遺跡、三国の鼻遺跡など各遺跡から出土する朝鮮半島系遺物からも容易に想像できるものである。これに続く津古1号墳は、2号墳の西側丘陵に近接し4世紀の中頃から後半に築造されたと推定される全長 42m の前方後円墳である。前方部は細くて低く、古式古墳の特徴を持つ。未調査のため、出土遺物は知られていない。現在は公園化され保存されている。

その後、三国の鼻1号墳が築造される。全長 66m を測る小郡市最大の前方後円墳である。この段階では周辺地域に追従する古墳がみられなくなり、地域連合のなかでの首長権が明白で、旧御原郡を統括するレベルの盟主であったと考えられている。前方部に2基、後円部に1基の主体部が確認されている。墳頂には2重口縁壺が配置される。ほぼ同時期に宝満川をはさんで焼ノ峠古墳が築造される。全長 40.6m を測る九州最大の前方後方墳で、周溝からは2重口縁壺が出土している。三国の鼻6号墳は1辺 13.7m × 11.6m を測る方墳で割竹形木棺を採用する。出土遺物は皆無であったが、主体部の構築方法は1号墳と共通しており、同時期の築造と考えられている。これら大型古墳など首長墓系列以外の墓には、前時代から続く横隈狐塚遺跡の石棺墓や土壙墓、横隈山遺跡、三沢畝道町遺跡の方形周溝墓などが採用



第3図 横隈山古墳位置図 (S=1/10,000)

されている。

三国の鼻1号墳に続く首長墓系列は不明であるが、候補として挙げられるのが花聳2号墳である。現状では破壊されており正確な規模は不明であるが、径32m前後の円墳もしくは前方後円墳と考えられている。三国の鼻1号墳と比べ、急激に規模が縮小している。出土遺物には厚い板状の鉄鋌や直刃の鉄製鋤先などがあり、築造時期は4世紀後半代に遡る可能性がある。隣接する花聳1号墳は5世紀前半代の築造である。墳丘規模は不明であるが、主体部には竪穴式石室が採用され、副葬品として三角板革綴短甲などが出土している。

北部九州では5世紀代の古墳から滑石製品が多く出土することが知られており、その製作工房は新宮町夜臼遺跡、志免町松ヶ上遺跡、太宰府市裏の田遺跡などで見つかっている。小郡市では西島遺跡で5世紀前半から中頃にかけて4軒の竪穴住居で滑石製玉作りが行なわれていた。近接する佐賀県基山町伊勢山遺跡では、同時期に滑石製品を用いた祭祀が行なわれた2号住居跡がみつかり、西島遺跡から供給されたものと考えられている。伊勢山遺跡2区の1号住居跡からは朝鮮半島系の高坏が出土しており、これら滑石製品の製作技術が渡来系集団によってもたらされたことが想定されている。先述した花聳2号墳出土の鉄鋌は、朝鮮半島南部を中心に出土する板状鉄製品と考えられ、同様に朝鮮半島系の鉄製品であるU字形鋤先が花聳1号墳、横隈狐塚遺跡、朝倉市池の上・古寺墳墓群、柿原古墳群などで出土している。朝鮮半島との交流が活発であったことを示している。

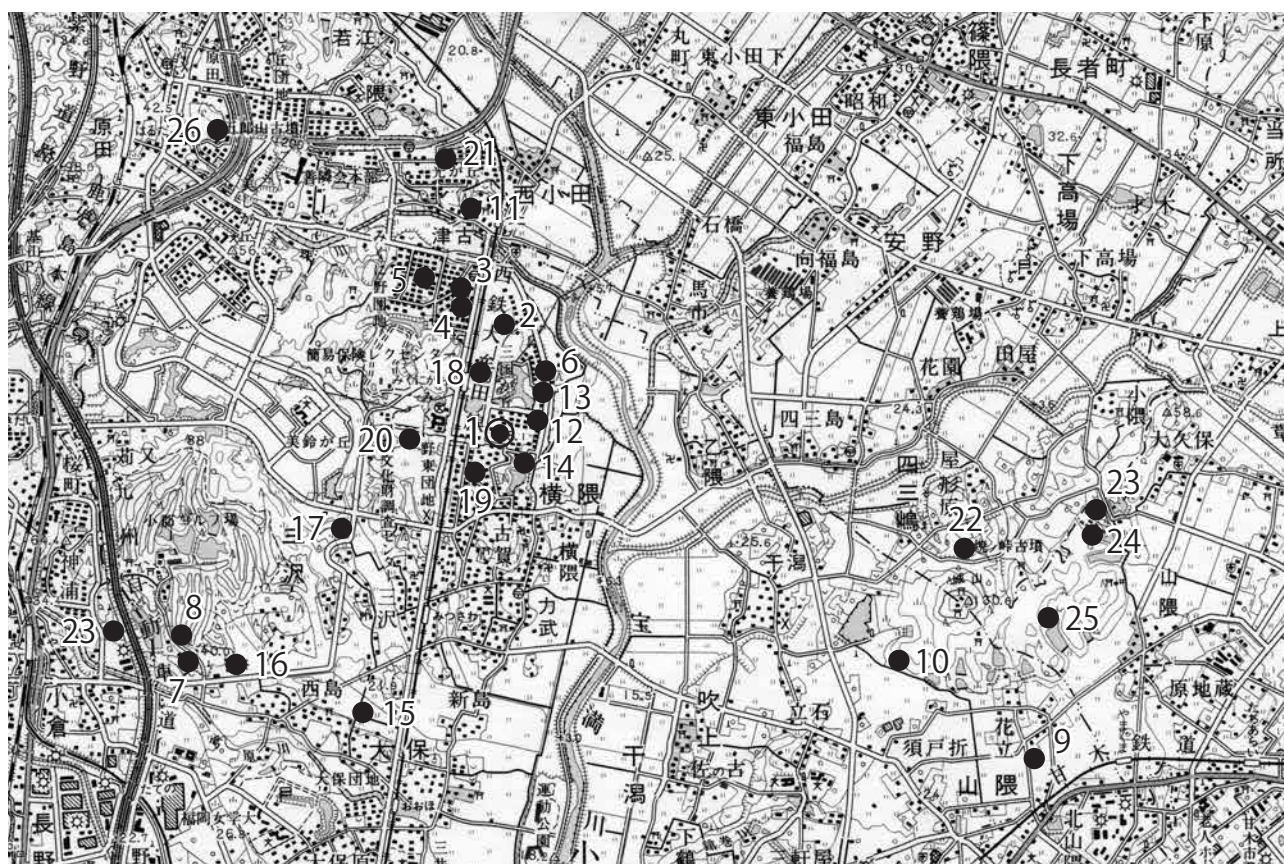
筑後地方では5世紀の前半頃に広川町の石人山古墳、久留米市の石櫃山古墳、浦山古墳などに横穴式石室が採用される。小郡市内ではこの初期横穴式石室を採用した古墳は知られていない。市内で最も早く横穴式石室を採用した古墳は三沢古墳群1号墳で6世紀初め頃に比定される。一方、うきは市月岡古墳では竪穴式石室が採用されており、阿蘇凝灰岩製の長持形石棺が納められるなど畿内の色彩が強く、周辺地域の大型古墳とは一線を画している。また、この時期には小郡市内でも集落・墓地の形成が著しく減少する傾向がみられる。この時期の集落は極めて少なく、三沢栗原遺跡などに確認できるのみである。

小郡市内では初期須恵器窯跡は確認されていないが、筑紫野市の隈・西小田遺跡群や花立山南東側に位置する朝倉市の小隈窯跡、山隈窯跡で初期須恵器が焼成されている。これらの初期須恵器は朝倉市池の上・古寺遺跡、小田茶臼塚古墳に副葬されたことが知られている。小隈窯跡に隣接する小隈古墳は全長54mを測る前方後円墳で、墳形は小田茶臼塚古墳に類似する。出土した須恵器からTK208段階並行期の築造と考えられている。山隈窯跡では埴輪も焼成されており、小隈古墳に供給されていることが知られている。池の上6号墳からは鍛冶道具が出土しており、この周辺で須恵器をはじめ、鉄器の生産活動が活発に行われていたことがうかがえる。

三沢古墳群では5世紀後半段階に古墳群の造墓が開始されたと考えられている。まず19号墳が丘陵尾根部に築造される。真上に18号墳が築造されているため規模等については不明であるが、主体部に竪穴系横口式石室を採用する円墳である。古墳以外の墓では、横隈鍋倉遺跡Ⅱで竪穴系横口式石室と同様の構造を有する初期横穴墓が2基造営される。墓道前庭部に土器の供献がみられるなど、古墳と同様の埋葬方法をとっていたものと想定される。筑紫野市巡り尾遺跡Ⅰでも同時期と考えられる初期横穴墓が検出されている。福岡県内における横穴墓の分布は筑後川以南、遠賀川流域、豊前・北九州域、宗像地域に多い。小郡市周辺地域では巡り尾遺跡Ⅰ以外に横穴墓が確認されていないことから、同時期に横穴墓が盛行する豊前地域、筑豊地域との交流がうかがえる。そのほかに津古生掛、横隈狐塚遺跡Ⅱ、三沢京ヶ浦遺跡、三沢古墳群、松尾口、隈・西小田遺跡群8地点、合の原遺跡などでも横穴墓は確認されているが、いずれも6世紀後半から8世紀中頃までのものである。現在のところ6世紀初頭から中頃にかけての横穴墓は周辺地域でも確認されておらず、横隈鍋倉遺跡Ⅱや巡り尾Ⅰ遺跡例は一時的な造墓と考えられる。

小郡市周辺地域における大型古墳は、6世紀前半代の空白期において6世紀中頃から7世紀初め頃にかけて、筑紫野市の五郎山古墳、小郡市内では西下野1号墳、花立山穴観音古墳が築造される。他地域

と比較しても首長墓としてはいずれも小規模なものである。西下野1号墳は、未調査であるが6世紀中頃から後半にかけて築造されたと考えられる前方後円墳で、小郡市域では円筒埴輪を最後に採用した古墳である。花立山穴観音古墳は当地域では最大で最後の前方後円墳で、石室構造は複室構造の横穴式石室で全長12.3mを測る巨石古墳の部類に属するものである。石室には彩色こそみられないが、連続三角文や斜格子文、格子文からなる線刻壁画古墳最終段階の実態を示している。墳丘裾部のからテラスにかかったところで須恵器・土師器を配置した墳丘祭祀の原状態が保存された状態で出土しており、埋納当初の状況と土器の組合せなどの正確な情報を伝える第1級資料である。また、花立山穴観音古墳の立地する花立山山麓には小郡市側だけでも300基を超える群集墳が確認されており、小郡市教育委員会によって精力的な分布確認調査が継続して実施されている。



1. 横隈山古墳
2. 津古生掛古墳
3. 津古2号墳
4. 津古3号墳
5. 津古1号墳
6. 三国の鼻1号墳
7. 花聳2号墳
8. 花聳1号墳
9. 西下野1号墳
10. 花立山穴観音古墳
11. 津古片曾葉1号墳
12. 横隈鍋倉遺跡II
13. 横隈北田遺跡
14. 横隈狐塚遺跡
15. 三沢畝道町遺跡
16. 西島遺跡
17. 三沢栗原遺跡
18. 三沢京江ヶ浦遺跡
19. 横隈山遺跡
20. 三沢蓬ヶ浦遺跡C
21. 隈・西小田遺跡群
22. 焼ノ峠古墳
23. 伊勢山遺跡
24. 小隈窯跡
25. 小隈古墳
26. 五郎山古墳

第4図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

第3章 横隈山古墳の概要

横隈山古墳は、小郡市みくに野東団地内に所在する。昭和48年に実施された横隈山遺跡群の発掘調査ののち、市民による保存運動によって現地に横隈山古墳公園として保存された。墳丘の測量と踏査により、古墳時代中期の帆立貝式前方後円墳と考えられていた。この時点で、古墳の墳裾は周辺の宅地および道路部分から6～10mの比高差があったため、公園の周囲はコンクリートブロックの擁壁で雛壇状に囲まれている。住宅地が造成される以前は、三国丘陵から舌状にのびる先端部に位置し標高44～47mを測る。

平成24・25年度にわたる調査の結果、横隈山古墳は全長31.6m、後円部径23.1m、前方部長10.5m、幅11.4m、くびれ部幅9.6mを測る前方後円墳であることが明らかとなった。また、前方部側でやや歪な形状を呈す周溝を確認しており、幅約7.0mを測る。後円部墳頂には埴輪列が円形にめぐっており、推定直径約8.4mを測る。埴輪列には配列間隔および法量から推定約100個体の円筒埴輪、朝顔形埴輪が、そのほか家形埴輪、蓋形埴輪などが樹立していたものと考えられる。

第4章 遺構と遺物

1. 古墳

1) 盗掘坑（第6図 図版3）

盗掘坑は、後円部墳頂のほぼ中央から南側に向かって開口するように開く。規模は南北7.4m、東西5.4mを測り、後円部墳頂を大きく破壊している。木の根による攪乱と厚い腐葉土が堆積しており、平板測量時には上端の位置を見誤っていた。表土除去後に実施したトレンチ調査とでは盗掘坑の形状が大きく違っている。盗掘坑下端は厚い表土と墳丘流出土に覆われていたため未実測である。第5図はトレンチ調査時に手測りした上端に平板測量時の下端を合成したものである。

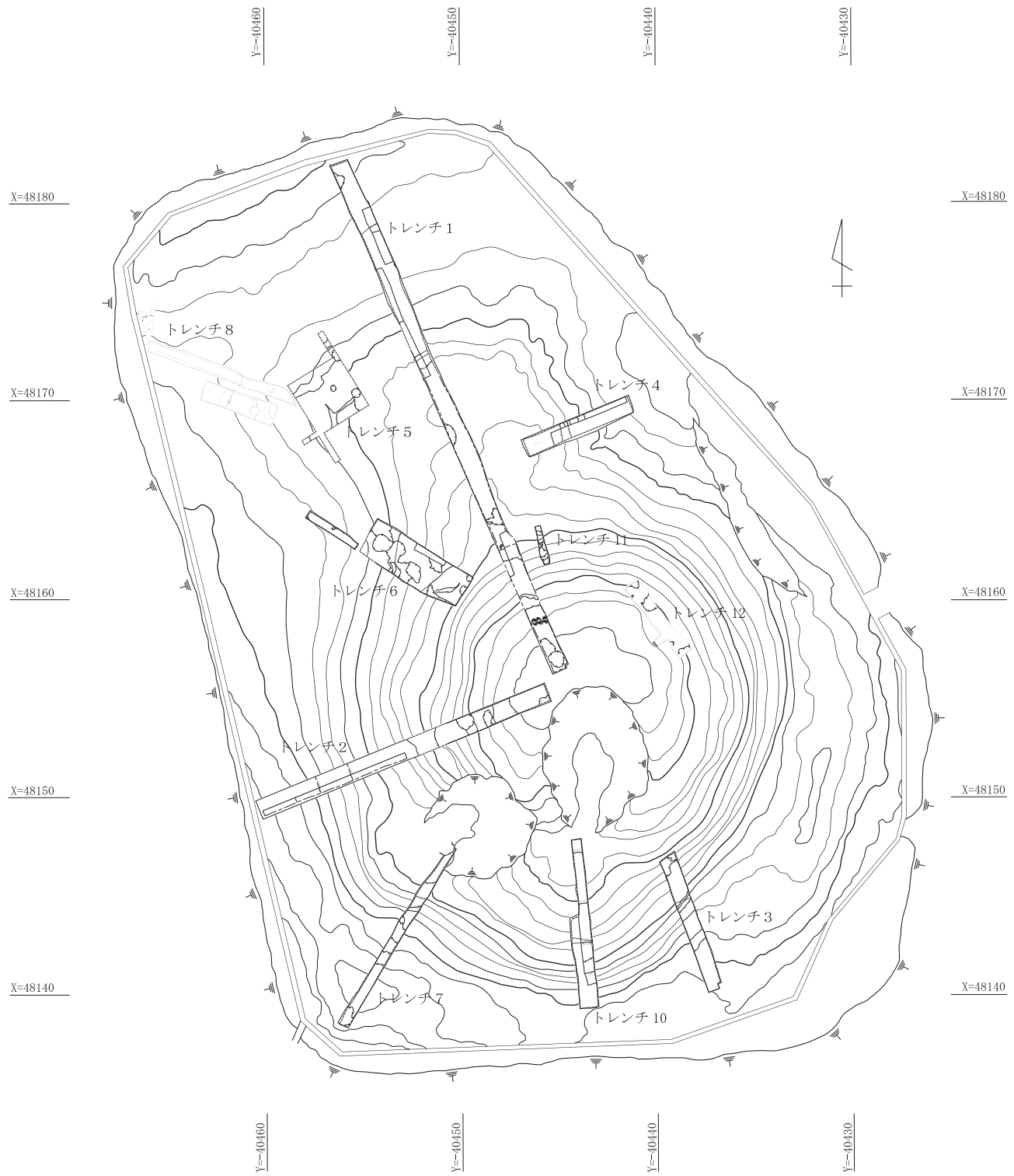
盗掘坑内部に埋葬施設が存在したと想定されたことから、まず表土除去を行ない、南北方向に1本、その西側に東西方向の2本のサブトレンチを設定した。埋土は腐葉土を中心とした表土と墳丘からの流出土の互層堆積をなしている。南北トレンチは、第15層以下は墳丘盛土と考えられ、第16層以下は攪乱である。北側サブトレンチの第7～9層は水平堆積であり、11層を含め墳丘盛土の可能性はあるが、詳細は不明である。南側サブトレンチはすべて自然堆積であり、覆土にはビニル袋が混入していた。土層断面からは石室や石棺といった埋葬主体の痕跡は一切確認できなかった。埋葬施設およびその内容については不明である。

2) トレンチ

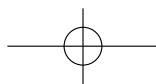
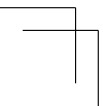
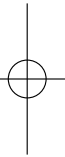
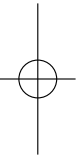
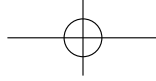
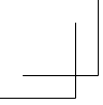
横隈山古墳の確認調査は古墳の墳丘規模、形状、各トレンチから出土した遺物から築造時期を把握することを目的とし、必要最小限のトレンチを設定（第5図）した。平成24年度に実施した第1次調査では、後円部規模が確定できなかったほか、周溝範囲、埋葬施設の詳細が不明であったため、平成25年度には平成24年度に調査を実施したトレンチの延長および新規トレンチ3本を設定し調査を実施した。

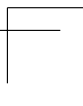
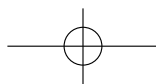
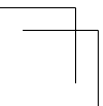
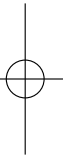
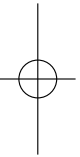
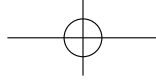
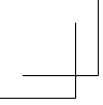
トレンチ1（第7図 図版4）

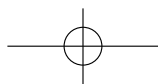
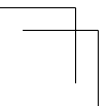
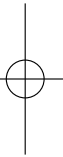
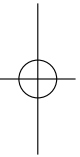
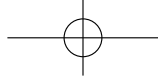
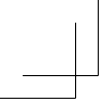
トレンチ1は事前に実施した詳細墳丘測量の結果から得られた推定墳丘主軸に沿って、後円部墳頂中央付近から前方部方向に長さ28.4メートル、幅1mで設定し、墳丘規模、築造方法、周溝の有無を確認することを目的とした。墳丘上には腐葉土が堆積しており、この腐葉土からなる表土直下が墳丘である。墳丘は木の根による攪乱を著しく受けているほか、墳丘の流出が著しく、一部プランが不明瞭であ

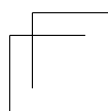
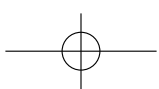
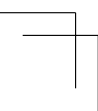
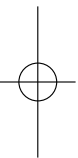
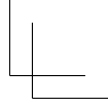
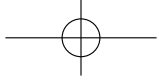
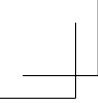


第5図 横隈山古墳トレンチ位置図 (S=1/300)









る。トレンチ調査は表土の除去を中心とし、後円部と前方部の境、前方部裾、周溝部にサブトレンチを掘削し、墳丘の構築方法を土層観察から明らかにした。

後円部と前方部の境に設定した長さ2mのサブトレンチは、第1～6層が墳丘流出土の堆積、第7層以下は墳丘盛土である。後円部裾はサブトレンチ南端から80cmの位置で標高は45.65mを測る。後円部裾では径25cmほどの人頭大の礫が1点出土した。取り上げは行っていない。土層観察では後円部裾にはりついていることから、葺石の一部である可能性を検討したが、そのほかのトレンチでは同様の礫は全く確認されていないことから、当古墳に葺石はなかったものと考えられる。

前方部裾で設定したサブトレンチは第1～7層が墳丘盛土である。黒色土を呈するシマリの強い旧地表がわずかに地山上に残存しており、墳丘はこの旧地表上に盛土によって構築されているものと考えられる。この旧地表は弥生時代中期の遺物を包含している。

前方部裾の標高は44.97mである。この前方部裾からテラス状の緩やかな傾斜面が1.38mほど広がっており、周溝部へとつながる。トレンチ1の北端では周溝が旧地表から掘り込まれたものであることが土層から明らかとなり、墳丘は旧地表上の盛土で、墳丘裾からのびるテラスと周溝は旧地表から地山の削りだしである。前方部側で検出された周溝は幅7mを測り、周溝上端の標高は北側で44.4m、前方部側では44.55m。周溝基底は標高43.95mを測る。第20層から38層、40層から48層は周溝埋土である。第39層は旧地表である。

後円部墳頂では埴輪列（第8図）を検出した。埴輪列が樹立された標高は47.5m付近である。後円部墳頂は比較的平坦な面をなしている。

トレンチ2（第9図 図版5）

墳丘主軸方向に直行して、後円部墳頂から南西方向へ設定した長さ15.9m、幅1mのトレンチである。後円部端と周溝部を確認している。

墳丘はトレンチ1で確認されたのと同様に旧地表上に盛土で構築される。後円部墳裾は後円部中心から11.6m付近に位置する。墳裾から周溝へとのびるテラスは水平距離で1.58mを測り、墳裾から周溝上端までは弧を描くように地山を削りだしている。トレンチ西端で周溝の床面は標高42.88m、周溝上端の標高は43.8m、深さは最大92cmを測る。

トレンチ3（第10図 図版6①～③）

トレンチ3は後円部の規模を確認する目的で、後円部南側のトレンチ1延長線上に長さ7.37m、幅80cmで設定した。トレンチ北側は切り株の撤去ができなかったため未掘である。墳裾を切る中世の土坑状遺構を検出しており、トレンチ3の調査では後円部規模は明らかにできていない。土坑状遺構の全容はトレンチ調査のため不明であるが、断面U字形を呈する。

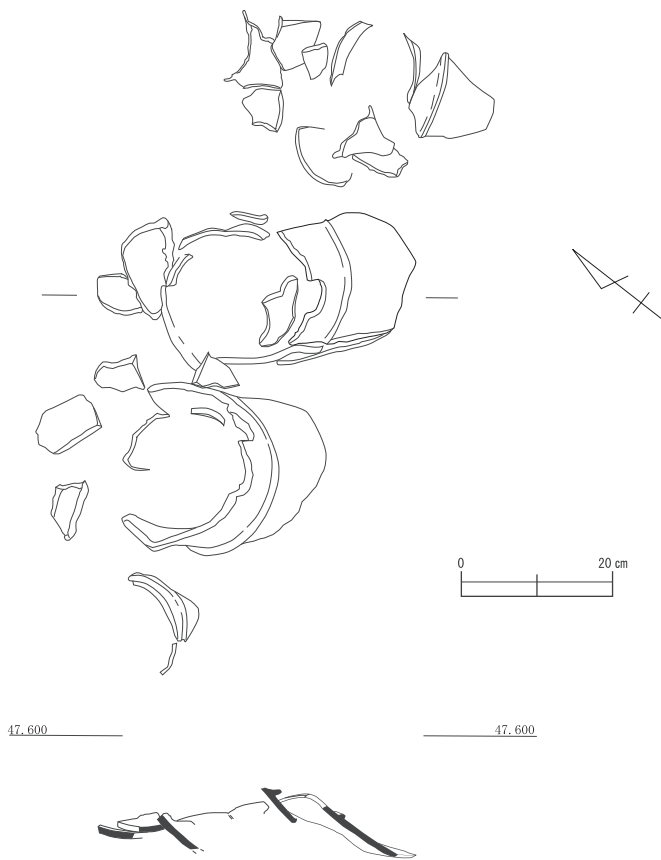
この土坑状遺構以南には前方部からまわる周溝が検出されるものと考えていたが、硬くしまった明赤橙色を呈する花崗岩ばいらん土が露出したのみであった。しかしながら、平成25年度の第2次調査では、隣接するトレンチ10で周溝部が確認されており、延長上に当たるトレンチ3の南側でも周溝が存在することが想定される。検出された花崗岩ばいらん土が周溝埋土であった可能性がある。

埋土中から埴輪片が数点出土した、また、土坑状遺構の下層から底部糸切の土師皿が出土した。いずれも著しく風化している。うち2点は同一個体と考えられるが接合しなかった。残り1点は細片のため図示しえなかった。

トレンチ4（第11図 図版6④～⑥）

前方部の幅および、周溝の広がりをも明らかにする目的で、前方部裾付近から北西方向にむけて、墳丘主軸に直行する長さ5.95m、幅1.05mのトレンチを設定した。前方部裾と周溝を確認した。トレンチ周辺では須恵器細片を表採している。

墳丘は旧地表上に盛土で構築される。墳裾の標高は44.76m、トレンチ東端での周溝床面の標高は



埴輪下位は未掘のため不明
取り上げは行わず現地保存とした。

第8図 横隈山古墳埴輪列実測図 (S=1/10)

した。北東端の追加トレンチは長さ 1.5m、幅 30cm で設定した。北側にみられた周溝が続いており、トレンチ 1 と比較するとテラス部が広がっていることが明らかとなった。南西側への追加トレンチは長さ 86cm、幅 25cm である。前方部裾から緩やかに落ち込むテラスが広がることが明らかとなった。南東側への追加トレンチは長さ 1.6m、幅 30cm である。南西側にやや傾斜しており、南東端は緩やかに落ち込む。前方部がくびれ部へ屈曲していることを示しているものと考えられる。

埴丘盛土は第 5、6 層および 11 層である。上層はすべて埴丘からの流出土で、埴丘盛土と同色、同質であるがシマリが弱い。前方部埴裾の標高は 44.7m 付近となる。

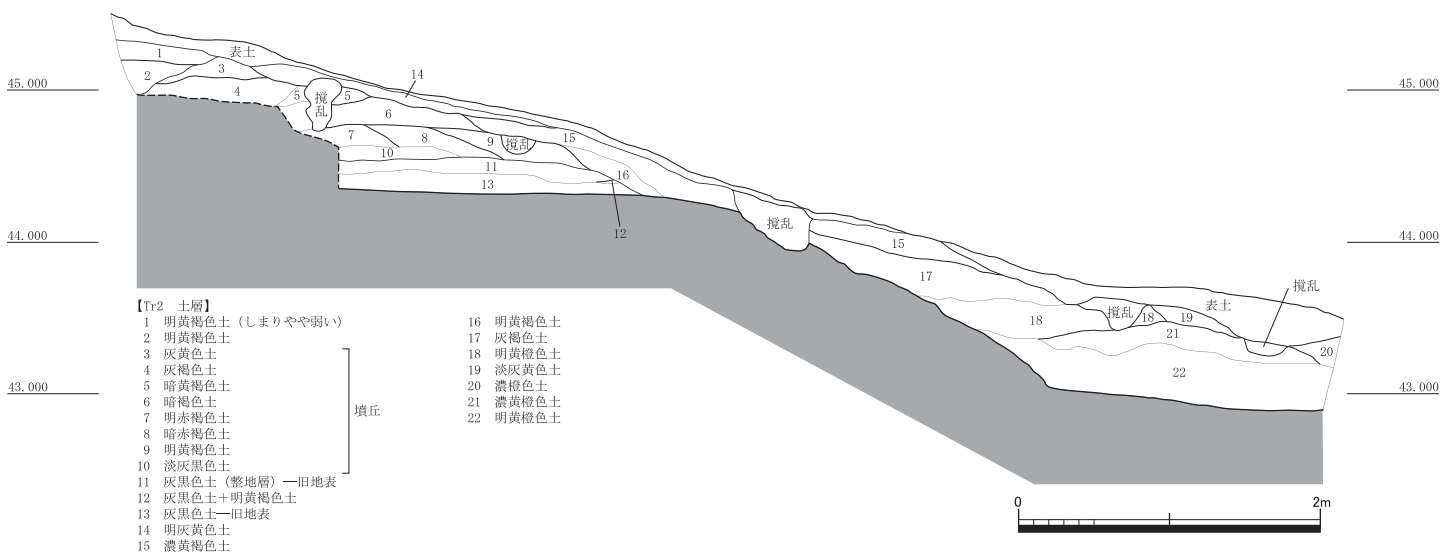
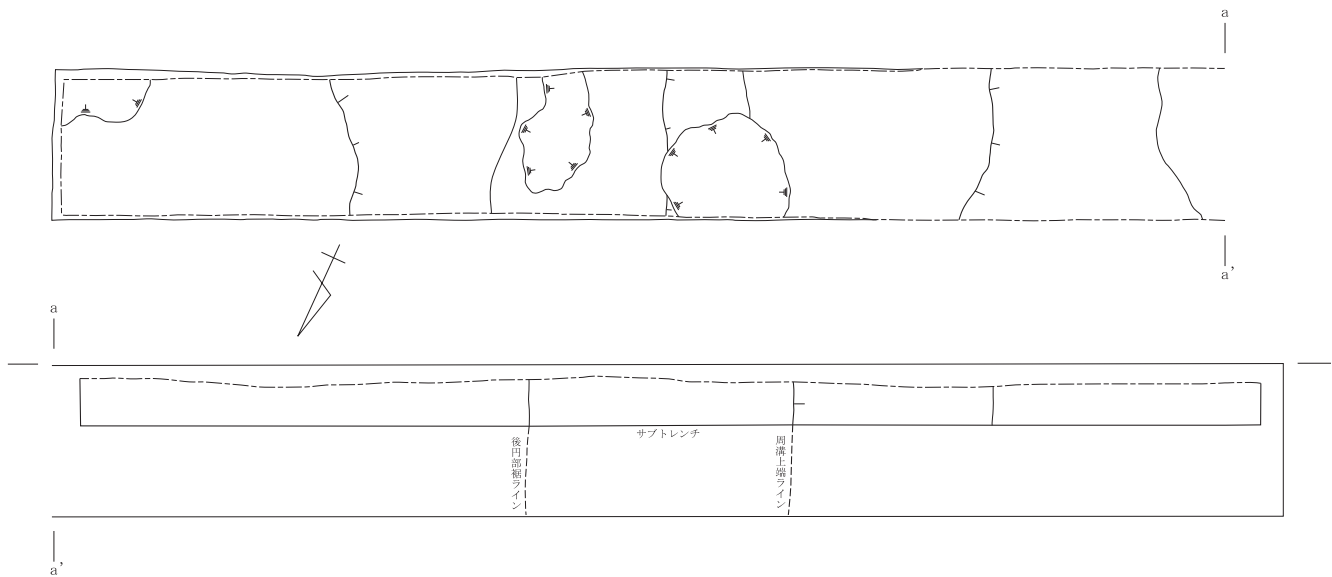
土層から、埴裾は東壁では南側から 2.32m、南壁では東から 2.16m 付近に位置する。

43.7m である。埴裾から周溝下端までの深さは最大 55cm を測る。他のトレンチと異なり、埴裾から延びるテラスはなく、埴裾から周溝部へ急激な落ち込みがみられる。第 1・2 層は埴丘からの流出土で、第 3 層以下 13 層までは埴丘盛土である。第 16 層から 27 層は周溝埋土である。

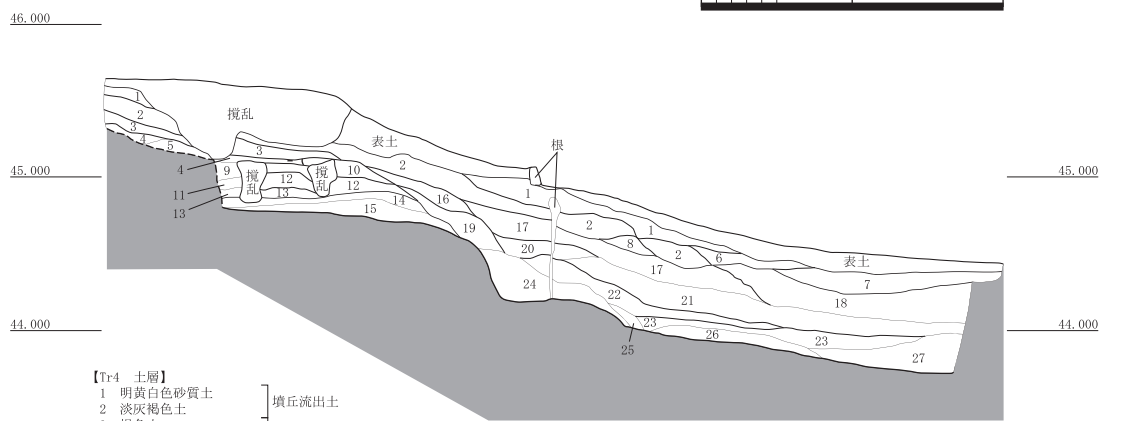
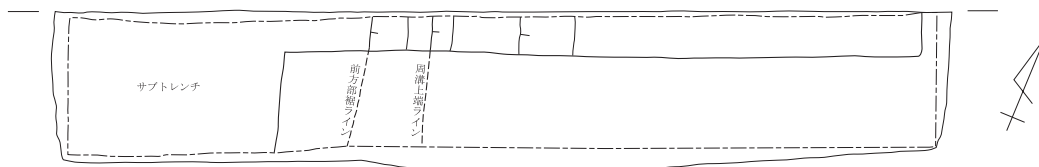
トレンチ 5 (第 12 図 図版 7)

トレンチ 5 は、前方部裾およびテラス、周溝を確認する目的で前方部端の北西側に 3 × 3 m の面的な調査を実施した。根による攪乱を受けており、埴丘の平面プランは不明瞭である。北側では、周溝および、前方部から周溝部にかけてひろがるテラス部と考えられる緩やかな落ち込みが検出された。表土直下が埴丘であり、テラス部の埋土は埴丘からの流出土である。また、埴丘盛土が流出したことにより、前方部は土層から前方部裾を確認している。旧地表面は確認できていない。

一部の検出のみであった周溝およびテラスの広がりを確認するため、北東端に北西方向へのトレンチ、南西端にも南西側、南東側への計 3 本のトレンチを追加

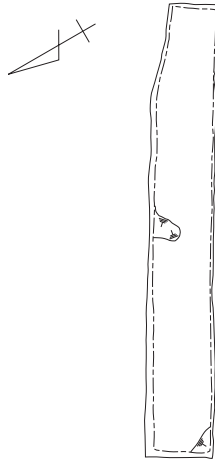
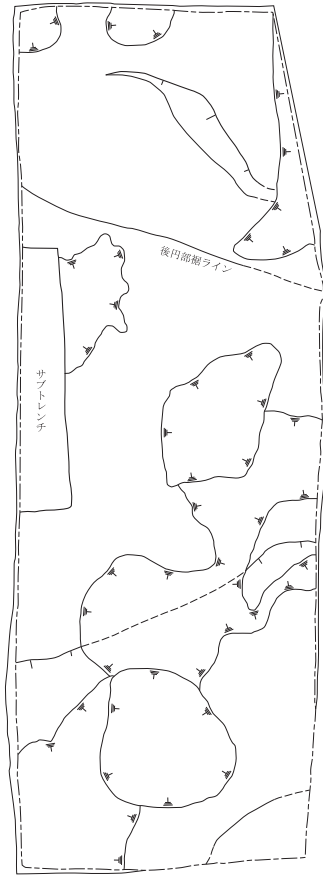


第9図 トレンチ2実測図・土層図 (S=1/50)



- 【Tr4 土層】
- | | | | | | | | |
|-------------------|-------|----------|-------|----------|-----------------------|----------|-----|
| 1 明黄白色砂質土 | 墳丘流出土 | 11 灰黄色土 | 墳丘盛土 | 16 暗黄褐色土 | 21 灰黑色土 | 26 淡灰黄色土 | 墳丘 |
| 2 淡灰褐色土 | 墳丘盛土 | 12 橙褐色土 | 墳丘盛土 | 17 暗褐色土 | 22 濃赤褐色土 | 27 暗赤褐色土 | 流出土 |
| 3 褐色土 | 墳丘盛土 | 13 赤褐色土 | 墳丘流出土 | 18 暗灰褐色土 | 23 赤褐色土 (淡灰黑色土を含む) | | |
| 4 暗褐色土 (土器片含む) | 墳丘盛土 | 14 淡灰黑色土 | 旧地表 | 19 黒褐色土 | 24 灰黑色土 (黄褐色土ブロックを含む) | | |
| 5 淡灰黒色土 | 墳丘盛土 | 15 暗褐色土 | | 20 暗褐色土 | 25 明黄褐色土 | | |
| 6 暗橙褐色土 | | | | | | | |
| 7 暗褐色土 (暗黄褐色土を含む) | 墳丘流出土 | | | | | | |
| 8 暗褐色土 | | | | | | | |
| 9 明橙褐色土 | 墳丘盛土 | | | | | | |
| 10 淡黄灰色土 | | | | | | | |

第 11 図 トレンチ 4 実測図・土層図 (S=1/50)



第 13 図 トレンチ 6 実測図 (S=1/50)

トレンチ6 (第13図 図版8①、②)

トレンチ6はくびれ部の形状を明らかにする目的で、西側くびれ部に長さ5.75m、幅2mの面的な調査を実施した。表土直下が墳丘であったため、表土の除去と地形変化点の確認のみとし、掘削は行っていない。樹の根による攪乱が著しく、わずかな地形変化が抑えられたものの、詳細なくびれ部形状は明らかにできなかった。

トレンチ北西壁で北から1.26m付近、南西壁で南から5.2m付近に地形変化点がみられ、後円部墳裾と考えられる。標高44.7mを測る。

北西端の墳裾と西側に広がることを想定される周溝を確認するため、北西側に長さ3m、幅45cmの追加トレンチを設定した。この範囲では周溝は確認できず、緩やかな傾斜をもつテラス部が検出された。このことから、周溝が墳丘相似形ではなく、盾形もしくは馬蹄形を呈するものと考えられる。

トレンチ7 (第14図 図版8③、④)

トレンチ7は事前の墳丘測量調査の際、調査区北西端でわずかな窪みが確認できたため、周溝の有無を確認する目的で約7m、幅60cmのトレンチを設定した。第2次調査では後円部裾を確認する目的で後円部側へ4.81m延長している。

後円部裾から南西方向に広がるテラス部を確認した。第2次調査では、後円部裾を確認している。周溝は前方部のように明瞭な立ち上がりは確認できず、墳丘裾からなだらかな傾斜面を有している。

旧地表は標高44.85mで検出している。後円部にみられた第6層は旧地表に似るが異なる。トレンチ北西端から1.45mで旧地表を確認している。墳裾はトレンチ端から2.77m付近で確認している。墳裾の標高は44.66m。墳裾からは標高43.03mまで緩やかに傾斜し、周溝へとつながる。墳丘側の周溝上端は北西端から4.3m付近と考えられる。

トレンチ8 (第15図 図版9)

トレンチ1で検出された周溝の推定延長線上に設定した長さ4.83m、幅65cmのトレンチである。根による攪乱が著しいものの、検出された周溝は、トレンチ西端から2.4m付近が最も深く、基底部の標高は43.45mを測る。第1次調査で明らかにできなかった周溝の範囲を第2次調査でトレンチを拡張し、テラスの拡がりや墳丘側周溝上端の屈曲点を確認している。

トレンチ8-2はトレンチ8の南側を一部拡張し、周溝およびテラスの広がりを確認するため、トレンチ8の南西側に隣接して長さ3.98m、幅1.15mを設定した。

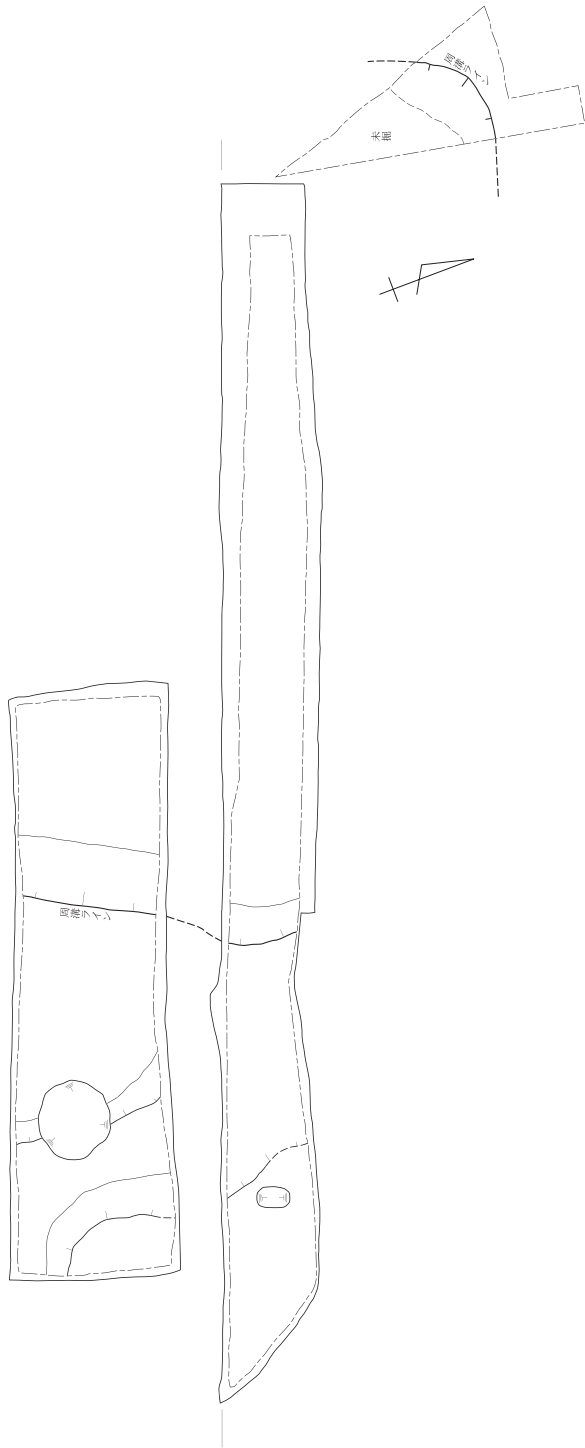
トレンチ9

トレンチ9は、調査を実施しなかったため欠番とした。当初は周溝の拡がりを確認する目的で調査区南西端の排水溝に沿って設定する予定であった。しかし、トレンチ2およびトレンチ7で周溝が盾形もしくは馬蹄形を呈することが明らかとなったため、調査を実施していない。

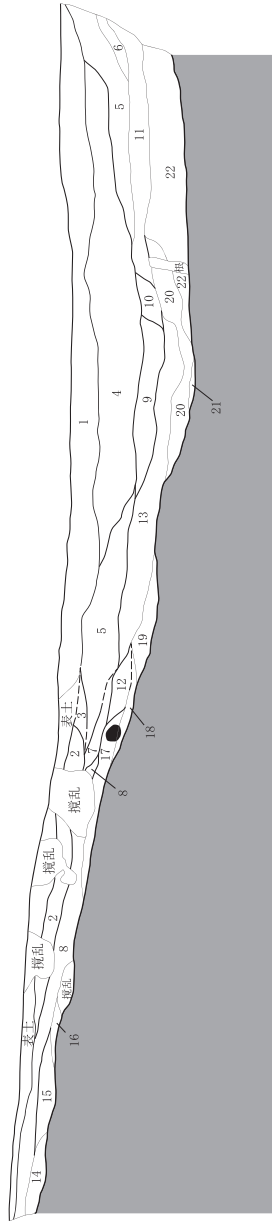
トレンチ10 (第16図 図版10)

トレンチ10は、第1次調査で不明であった後円部規模確認のため、後円部南側に設定した長さ7.3m、幅1mのトレンチである。後円部裾と攪乱による墳丘削平部分を確認した。墳裾の検出を目的としたため、盗掘坑付近は掘削せず表土の除去のみとし、トレンチ南側から長さ8.65m、幅1mの範囲を掘削した。

トレンチ南端から3.4mで後円部墳裾を確認した。墳裾の標高は44.15mを測る。墳丘は旧地表上に盛土で構築され、テラスおよび周溝は地山削り出しである。周溝南側は調査区外のため規模は明らかにできなかった。確認できた範囲での周溝床面の標高は43.25mを測る。墳裾からトレンチ8をトレンチ5まで長さ3.76m、幅64cmの範囲を延長した。前方部裾から広がるテラスと周溝は、周溝下端までなだらかに移行する。



43,000



- 【土層】
- 1 明赤褐色土
 - 2 暗赤褐色土
 - 3 暗黄褐色土
 - 4 灰蒸土
 - 5 淡灰黄色土
 - 6 暗褐色土
 - 7 暗褐色土
 - 8 暗赤褐色土
 - 9 暗赤褐色土
 - 10 暗灰褐色土

- 11 暗赤褐色土
- 12 暗赤土
- 13 黄褐色土
- 14 暗黄褐色土 (粒子細かい)
- 15 黄褐色土
- 16 暗赤褐色土 (2層より明度低い)
- 17 明赤褐色土
- 18 赤褐色土
- 19 明黄褐色土
- 20 暗赤褐色土

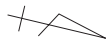
- 21 明褐色砂質土
- 22 明褐色砂質土

第15図 トレンチ8実測図・土層図 (S=1/50)

第 16 図 トレンチ 10 実測図・土層図 (S=1/50)

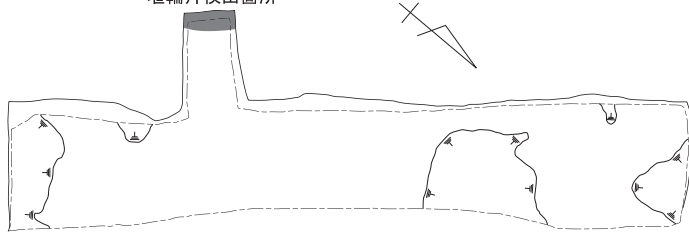


【トレンチ 11】



【トレンチ 12】

埴輪片検出箇所



第 17 図 トレンチ 11・12 実測図 (S=1/50)

この地点は盗掘坑からの廃土が厚く堆積していることが測量結果からも明白であった。盗掘坑部分に埋葬施設が存在した可能性を考え、副葬品や石室石材の有無を確認するため、覆土はふるいにかけ内容を精査したが出土したのは埴輪片のみであった。

トレンチ 11 (第 17 図)

トレンチ 1 周辺の表土除去を行なった際に、墳丘盛土と異なる色調の不明瞭なプランが現れた。埋葬施設である可能性から、墓道の確認のため、トレンチ 1 東側に隣接する後円部北側にトレンチ 11 を設定した。サブトレンチは長さ 2m、幅は 30cm である。現地表面から 20cm ほどで墳丘盛土を確認した。覆土は厚い腐葉土からなる表土と墳丘流出土である。表土の除去を行なったが、浅い溝状のくぼみが確認されたのみである。覆土中からは板石状の石片が少量出土したが、古墳に伴うものか不明である。木の根による攪乱が著しく、埋葬施設や墓道は確認できなかった。

トレンチ 12 (第 17 図)

埋葬施設確認のため、後円部東側墳頂部に設定した長さ 4.5m、幅 85cm のトレンチである。掘削は行なわず、表土除去のみとしている。表土直下は明黄橙色土でシマリの強い墳丘盛土である。墳頂部から後円部裾へと緩やかに落ち込むが、ほぼ平坦面を呈する。

埋葬施設およびその掘り方などは確認できなかった。後円部墳頂側へ一部トレンチを拡張したが、60cm ほどの地点で多量の埴輪片が出土したため、掘削を中止した。これらの埴輪片は出土位置から埴輪列の一部と考えられる。

3) 出土遺物

須恵器の出土量が極めて少ないことが特徴として挙げられる。横隈山古墳は限られた調査面積であるが、トレンチ 4 周辺でわずかに須恵器小片が出土したのみである。いずれも小片のため図示しえなかった。出土遺物はそのほとんどが埴輪で占められる。いずれも小片であり全容が明らかなものは出土していない。

今回の調査で出土した円筒埴輪を概観すると、大きく下記 3 種類の色調に分類される。

1. 黄色味の強い橙色を呈するもの
2. にぶい赤褐色、にぶい橙色を呈するもの
3. 明赤褐色、橙色を呈するもの

埴輪胎土は、肉眼観察では違いがほとんどみられない。石英、長石をやや多く含み、7mm 程度の大きな結晶を残すものもある。ごく一部に金雲母を含むものがみられるほか、盾形埴輪には角閃石を含むものがみられる。

第 18 図から 21 図の 1 から 43 は円筒埴輪である。円筒埴輪は各トレンチから出土している。44 から 47 は朝顔形埴輪である。第 22 図は家形埴輪でトレンチ 10 および盗掘坑から出土している。他のトレンチでは確認できなかったことから、後円部墳頂やや南寄りに樹立していたものと考えられる。第 23 図は蓋形埴輪で、トレンチ 1、2、盗掘坑から出土した。樹立位置は不明であるが、埴輪列付近と考えられる。第 24 図は盾形埴輪である。盾形埴輪はトレンチ 1 の後円部墳頂埴輪列付近からほとんどが出土しており、埴輪列付近に樹立していたものと考えられる。

円筒埴輪 (第 18 ~ 21 図)

1、5 ~ 7 はトレンチ 1、2 ~ 4、8 ~ 12 はトレンチ 2 から出土したものである。1 は体部で突帯上位の復元径 17.0cm を測る。外面 1 次調整タテハケ後 2 次調整ヨコハケを施す。一部タテハケが残る。突帯は 2 次調整後貼り付けている。内面は調整不明瞭であるが指ナデか。粘土帯接合痕が残る。2 は体部で突帯上位の復元径 23.1cm を測る。残存部位が少なく器面調整は不明瞭である。内面にはやや単位

の狭い粘土接合痕が残る。突帯は風化による影響もあるが強くナデられず、断面形は丸みを帯びた台形状を呈する。3は体部で突帯上位の復元径 19.5cm を測る。外面は1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケを施す。突帯は1と同様2次調整後、突帯と並行して内面指ナデで貼り付けている。器壁外面、突帯上位に2本の沈線からなるヘラ記号状の線刻がみられる。残存部位が少なく、ヘラ記号である確信はもてない。内面は粘土帯を指オサエで接合後、指ナデを施す。突帯は2と同様やや丸みをおびる。4は体部で突帯上位の復元径 19.4cm を測る。外面は1次調整タテハケ後、2次調整ヨコハケを施す。突帯は1次調整後に貼り付けており、タテハケがナデ消される。突帯貼り付け後に2次調整を施している。突帯下位には径 2mm 程の工具痕がみられる。他の埴輪では確認できないが突帯貼り付け間隔を設定した刺突痕であろうか。内面はナナメ方向の指ナデが施される。5は口縁部で、口縁端部はヨコナデと指オサエによって内面に強く屈曲する。小片であるため、これが意図的な屈曲であるか、部分的なものであるかは不明である。外面は斜め方向のハケメが施される。6は体部で突帯下位に円形の透かし孔が穿たれる。小片のため透かし穴の詳細な径は不明であるが、おおよそ 5cm 程度に復元される。外面調整は小片のため不明。突帯はやや丸みを帯びる。7は体部片である。やや厚みがあり底部付近であろうか。外面調整は不明瞭であるが、内面はタテ方向の指ナデが施される。8は口縁部で口縁端部は外側に強く屈曲する。器壁外面はやや単位の細かいハケメで内面は指頭圧痕が確認できる。小片のため口径不明。9は口縁部で8と同様口縁端部を外側に屈曲させる。外面は斜め方向のハケメでやや単位が小さい。内面調整は不明瞭である。小片のため口径不明。10は体部片でやや丸みを帯びた断面台形状の突帯が付く。外面、内面ともに調整不明瞭。11はしっかりとした断面台形の突帯が付く。12はやや崩れた突帯が付く。外面はわずかにタテハケが確認できる。

13～15、18～20はトレンチ3から。16、17、21～23はトレンチ4から出土した。13は体部で突帯上位の復元径 20.4cm を測る。やや低い突帯を貼り付ける。内外面ともに調整不明瞭。14は体部で突帯上位の復元径 19.8cm を測る。突帯下位には透かし孔が確認できる。やや歪みがあるが円形であろう。外面は2次調整ヨコハケで突帯貼り付け、透かし穴の穿孔は2次調整後である。上位がやや外傾しており、最上段となろうか。15は基底部で復元底径 15.8cm を測る。基底部は外面に粘土を貼り付け肥厚させている。外面は1次調整タテハケ後2次調整ヨコハケを施すが、器壁の剥離により一部1次調整タテハケが露出する。内面は接地面付近に指頭圧痕が残り、上位はタテ方向の指ナデが施される。16は体部で突帯上位の復元径 21.0cm を測る。上位はやや外傾しており最上段となるか。外面は1次調整タテハケのみ確認できる。突帯は強い横ナデによって断面M字状を呈し、1次調整タテハケ後貼り付けられ、タテハケが一部ナデ消される。内面はストロークの長い指ナデ調整が施される。17は体部で突帯からやや離れた下位に円形透かし孔が確認できる。外面は調整不明瞭。内面は指頭圧痕が残るが粘土接合痕が明瞭に残っており、成形がやや粗雑である。突帯はしっかりとした台形状で強いヨコナデで調整される。18は体部で断面台形状の低い突帯が付く。外面調整不明瞭で内面は指ナデを施す。19は体部で断面台形状の突帯が付く。内外面ともに調整不明瞭。20は基底部で内側はやや突出する。外面は1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ。内面は指オサエ後板ナデによって成形する。接地面には指頭圧痕が残る(図版13-7, 8)。21は体部で突帯上位やや離れた位置に円形の透かし孔が穿たれる。外面はタテハケのみが確認できる。内面は連続するストロークの長い指ナデ後指オサエ。突帯は断面台形状を呈する。22は体部でやや垂れ下がった断面台形状の突帯が付く。外面は1次調整タテハケ後2次調整ヨコハケで、内面はややストロークの長い斜め方向の指ナデを施す。23は体部で外面調整はタテハケのみ確認できる。内面はストロークの長い連続する指ナデで、突帯は強いヨコナデによって押しつぶされる。

24、29、30はトレンチ5、25、31～34はトレンチ6、35、36はトレンチ7。26～28、37～38はトレンチ10から出土した円筒埴輪である。24は体部でしっかりとした断面M字状に近い突帯が付く。突帯上位の復元径は 18.6cm を測る。外面は斜め方向のハケメが施され、突帯貼り付け時に一部ナデ消される。内面は指ナデが施される。25は体部で突帯上位の復元径 19.0cm を測る。断面からは単位の狭い粘土接合痕が確認でき、内面は指ナデが施される。外面調整は不明瞭。26は体部で突帯上位の復元

径 21.0cm を測る。外面は 1 次調整タテハケ後 2 次調整ヨコハケで静止痕が確認でき、ヨコハケで消えなかったタテハケが一部残る。内面は指ナデで一部粘土帯の接合に伴う指頭圧痕が多く残る。突帯は断面台形状で、2 次調整を施した後に突帯と並行した内面指ナデで貼り付けられる。27 は上位が外傾しており、口縁部は遺存しないが最上段であろう。図は反転復元したものであるが、最大径 22.0cm、突帯下位の最小径 18.6cm を測る。内外面ともに調整不明瞭で、内面には粘土接合痕が明瞭に残る。28 は体部で突帯上位の復元径 18.5cm を測る。外面は 2 次調整ヨコハケが施され、突帯下位に静止痕が確認できる。内面は指ナデが施されるが粘土接合痕が残る。突帯はナデによってやや幅広の崩れた台形状を呈する。29 は他の円筒埴輪と比べて器壁が極めて薄い。厚さは 0.6 ~ 0.85cm を測る。外面はタテハケのみが確認できる。30 は底部である。小片のため底径は不明。外面はタテハケが一部確認できる。接地面には線状の工具痕が見られる（図版 12）。31 は口縁部で口縁端部を外側に強く屈曲させる。外面は 1 次調整タテハケ後 2 次調整ヨコハケが施されるが、上位はやや粗雑でタテハケが残るほか、ゆがみによって単位が不明瞭となる。内面はナナメ方向の指ナデが施されるが、粘土接合痕が明瞭に残る。32 は口縁部で傾きから朝顔形埴輪の可能性もある。内外面ともに調整不明瞭。33 は口縁部で口縁端部を外側に強く屈曲させる。外面はヨコハケが施される。内面は調整不明瞭。34 は体部である。粘土接合痕を指ナデ調整しているが明瞭な段が残る。突帯はやや張り出した台形状を呈する。35 は口縁部で口縁端部を外側に強く屈曲させる。外面調整は不明瞭で、内面は指オサエ、粘土接合痕がわずかに残る。36 は体部で突帯下位は 2 次調整ヨコハケを施す。突帯は 2 次調整後の貼り付けである。37 は体部で突帯貼り付け時のナデによって器形が歪む。突帯はしっかりとした台形状を呈する。38 は器壁の薄い体部でやや M 字状を呈する突帯が付く。内外面ともに調整はやや不明瞭である。

39 ~ 41 はトレンチ 10 下層、42、43 は盗掘坑から出土した。39 は体部で断面台形状の突帯が付く。外面は調整不明瞭である。内面は粘土接合痕が残り指頭圧痕が確認できる。40 はやや器壁の薄い体部で断面 M 字状の突帯が付く。内面には粘土接合痕がわずかに確認できる。41 は体部で断面台形状の突帯が付く。外面は調整不明瞭。内面は指ナデを施す。42 は体部で突帯は断面やや丸みを帯びた台形状を呈する。外面は調整不明瞭。内面は斜め方向の指ナデを施す。43 は体部で上位はやや外傾する。接合時の歪みであろうか。突帯はしっかりとした断面台形を呈する。外面は調整不明瞭であるが、内面は斜め方向の指ナデを施す。

朝顔形埴輪（第 21 図）

44 ~ 47 は朝顔形埴輪である。44、45 はトレンチ 1、46 はトレンチ 3、47 はトレンチ 4、48 はトレンチ 12 から出土した。円筒埴輪体部中には朝顔形埴輪となるものもあろうが、ここでは頸部から口縁部にかけての朝顔形埴輪と判断できるもののみを示す。44 は頸部で突帯は見られない。最大復元径 22.2cm、最小復元径 15.8cm を測る。外面調整は不明瞭であるがタテハケが確認できる。内面調整はナデ。45 は朝顔形埴輪の口縁部であろうか。46 は突帯の付く頸部で上位の最大復元径 28.2cm、最小復元径 21.7cm を測る。外面 1 次調整タテハケ、2 次調整ヨコハケを施す。内面はヨコハケ後指ナデを施す。47 は頸部から口縁部で、ここで朝顔形埴輪として報告するが、器壁が薄く、口縁部形状も他の朝顔形埴輪と異なっており壺形埴輪の可能性も考えられる。また外面に黒斑が確認できるが、野焼き焼成によるものか窖窯焼成に失敗したものか判断できなかった。他の出土埴輪には黒斑は一切みられず、窖窯で 1 点のみを焼成したとは考えにくいことから野焼き焼成の可能性を残しておきたい。頸部から緩やかに立ち上がり、口縁端部は強く外反する。内外面ともに著しく風化しており調整は不明である。48 は口縁部で口縁端部内面にヨコハケ調整を施す。

家形埴輪（第 22 図）

1 は屋根端部である。壁部との接合面は確認できない。器壁表面には少量の赤色顔料が遺存する。2 は屋根頂部であろうか。頂部は摩滅し稜線が不明瞭であるが、ヘラ状工具による沈線が刻まれる。通常

屋根は頂部で2枚の粘土板を接合するが、これには接合痕が確認できない。小型品であることからこのような作り方をしたのかもしれないが、人物埴輪など他の形象埴輪の一部である可能性も考えられる。3は板状の埴輪片である。屋根部と考えられるが、断面形はやや曲面をなしており、赤色顔料も塗布されていないことから屋根である確証はもてない。接合面は緩やかにカーブを描いており、水鳥形埴輪などの胴部と接合する羽部分の可能性はある。4は壁部分と考えられる。上面は屋根との接合部と考えられる。下位に円形の透かし孔があり窓と考えられる。窓は復元径3.4cmを測る。裏面は焼成不良によるものか器壁の剥離が著しく調整不明瞭である。5は壁部分であろうか。円形の透かし孔が穿たれており、窓部と考えられる。6は家形埴輪の基壇部であろうか。表面には赤色顔料が塗布される。隅丸方形の接合面が確認でき、壁もしくは柱が付くものと考えられる。下面は粘土によって肥厚する。7は家形埴輪の基壇部であろうか。6とは色調が異なるほか、赤色顔料の塗布もみられない。裏面には円形の接合面が残存しており、円筒柱が接合するものと考えられる。

蓋形埴輪（第23図）

1は蓋形埴輪傘端部で復元径38.9cmを測る。端部からやや上位にヘラ状工具による沈線が1条めぐり、端部との間にハケメ状の擦痕が確認できる。2は円筒部と考えられる。外面調整は円筒埴輪と同様1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケが施される。内面は指オサエ後横方向の指ナデである。復元最大径27.4cm、最小径22.1cmを測る。3は蓋形埴輪円筒部と考えられる。器面調整、傾きが円筒埴輪と異なる。復元最大径27.2cm、復元最小径22.0cmで緩やかに外傾しながら立ち上がり、上位は直線的に立ち上がる。外面ナナメ方向のハケメで、内面は円筒埴輪と同様指オサエ後指ナデ調整が施される。上位にはナデによるハケメのナデ消しがみられる。4は傘部と考えられ、円筒部との接合部であろうか。1条の沈線がめぐる。円筒部との接合面は横ナデが明瞭に確認できるなどきれいな剥離面である。5は4と同一器種と考えられる。残存面は小さいが1条の沈線がめぐる。粘土の接合方法などに差異がみられることから同一器種ではあるが同一個体ではないと考えられる。6は蓋形埴輪の傘部であろうか。1条の沈線と直行する2条の沈線が線刻される。7は蓋形埴輪の傘部であろうか。上位に円形の透かし孔が穿たれ、透かし穴に沿うように1条の沈線が線刻される。透かし穴の復元径は5.0cm前後で円筒埴輪のものと近いが、外面調整はナデである。

盾形埴輪（第24図）

横隈山古墳から出土した盾形埴輪は3条の沈線で区画した綾杉文、綾杉文帯の内側に割付線を軸とした三角文を配置する文様構成を主とする。綾杉文、三角文ともに左右対称ではなくやや稚拙さがみられる。全容は不明であるが、円筒部の前面と側面に盾を貼り付けるタイプが想定される。

1は後円部墳頂埴輪列の内側から出土した。胎土中には他の埴輪にみられない角閃石がわずかに含まれる。円筒部との接合面を有し、端部は欠損する。3条の沈線で区画された綾杉文が内側の接合面付近と外側端部付近に確認できる。この綾杉文帯に挟まれて、割付線を中心軸とした外側に広がる三角文が配置される。円筒部との接合面の角度から、円筒部のやや側面寄りに貼り付くタイプが想定されるが、2のように円筒部前面に貼り付く盾部も確認されており、数種類の盾形埴輪が樹立していた可能性が考えられる。円筒部との接合面のカーブからは、径19～22cm程度の円筒部やや側面寄りに接合するようである。2は盾形埴輪の前面部であろうか。綾杉文と三角文が刻まれる。3は端部である。綾杉文が線刻される。4は三角文が刻まれた小片である。平坦面を有し盾形埴輪端部の可能性があるが、後述する8と同色・同質であることから靱形埴輪の可能性も考えられる。5は表面に4条の沈線が刻まれる。器壁表面は磨耗しているが沈線内部には線刻は確認できない。他の盾形埴輪と文様構成が異なるため、別の形象埴輪の可能性もある。6は小片であるが盾形埴輪であろうか。1.8cm前後と器壁は厚い。一部分であるが斜格子状の線刻が確認できる。他の盾形埴輪には見られない線刻であること、接合痕などから家形埴輪の波風板接合部の可能性も考えられる。7は盾形埴輪であろうか。表採-2と同様斜格子状

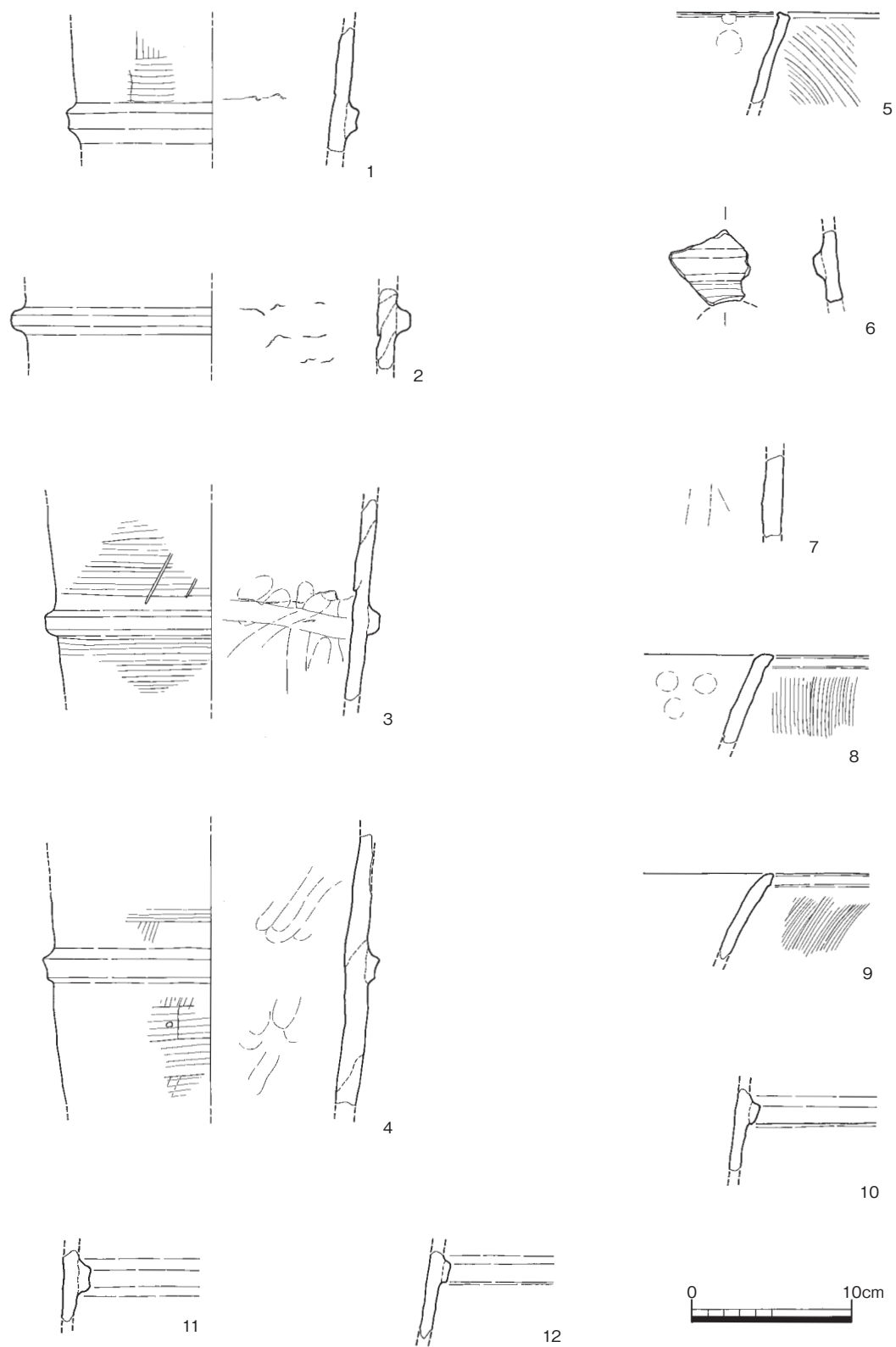
の線刻が確認できる。色調・厚さから6と同一器種と考えられる。6と同様に家形埴輪の波風板接合部の可能性がある。8は盾形埴輪として報告するが、断面形は平坦面をなし、上端が湾曲する形態から鞍形埴輪の可能性もある。文様構成は風化が著しくやや不明瞭ではあるが、外区には盾形埴輪と同様に綾杉文を配置しており、内側には太さの異なる2種類の放射状沈線を配置する。鍬表現などは確認できない。4は色調から同一個体の可能性がある。9は端部の綾杉文帯であろうか。3条の平行する直線が刻まれる。やや磨耗するが綾杉文は確認できない。10は小型の盾形埴輪であろうか。円筒部との接合面が確認できる。表面には1条のヘラ状工具による沈線が刻まれる。

その他不明形象・器財埴輪（第25図）

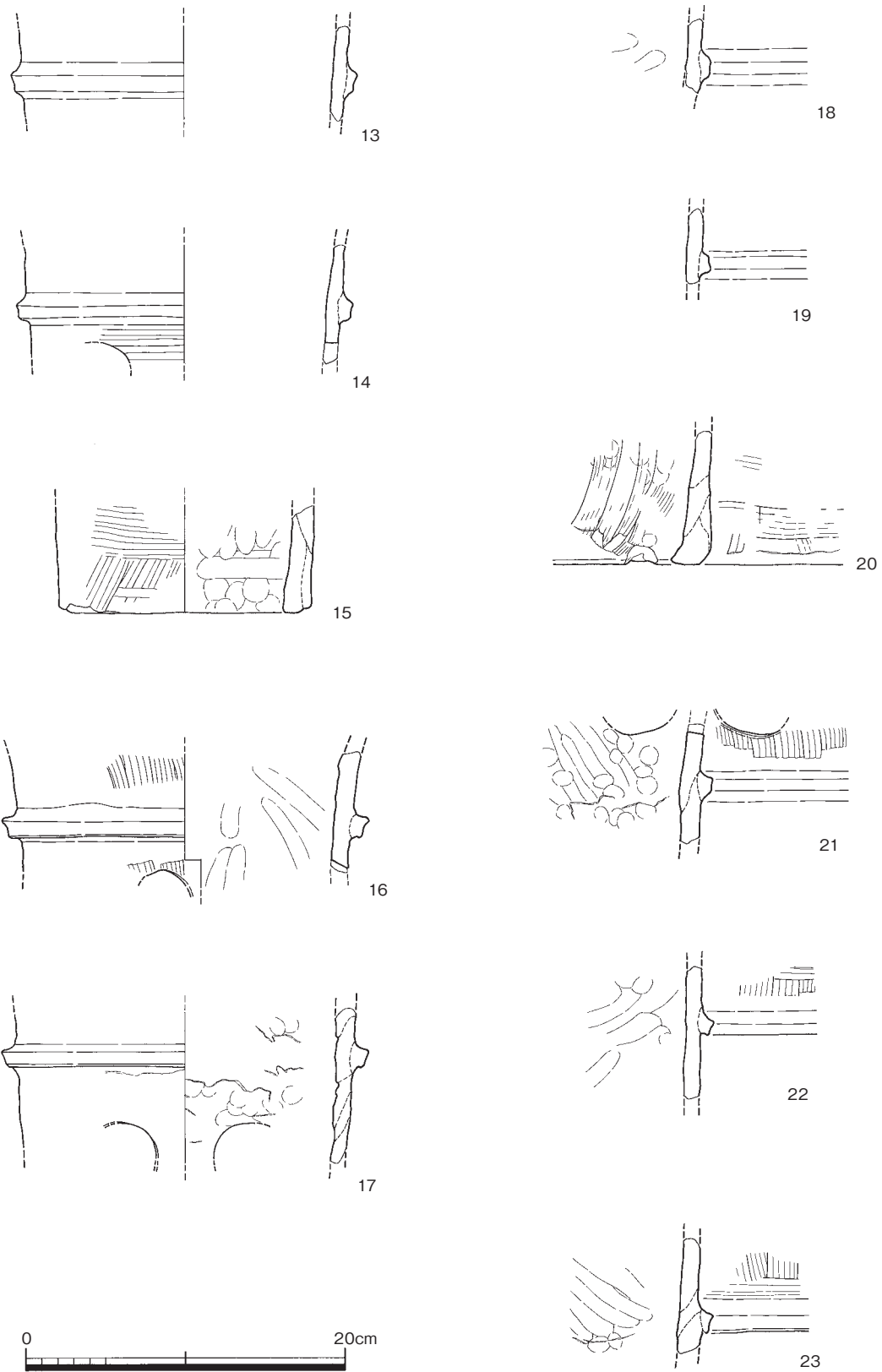
1は断面円筒状で1条の線刻がヘラ状工具によって刻まれる。表面は風化のため調整不明瞭であるが、平坦面がわずかに見てとれ、板ナデの可能性もある。2と同一器種か。2は1と同様断面円筒状で1条の線刻が刻まれる。断面からは1と直行する線刻を有することがわかる。3は板状の埴輪片である。家形埴輪の壁部であろうか。表面は丁寧にナデられており平滑面をなす。裏面は指オサエと指ナデが施される。4は円筒形の不明埴輪である。天地不明であるが、図上では上位に円形穿孔が、その右側にも形状が不明ながら生きている面が確認できる。下位の屈曲部から馬形埴輪の脚部もしくは人物埴輪の碗部や脚部となろうか。5は板状の埴輪片である。その形状から馬形埴輪のたてがみ部もしくは鳥形埴輪の羽や尾の可能性も考えられる。家形埴輪の破風板の可能性も検討したが、外面調整ナデであり異なる。6は内面のナデから傾きを出している。この傾きと調整から蓋形埴輪の円筒部になろうか。外面にはハケメ調整は確認できない。内面は下位が指オサエで上位に板ナデと考えられる平坦面が確認できる。

土器（第25図）

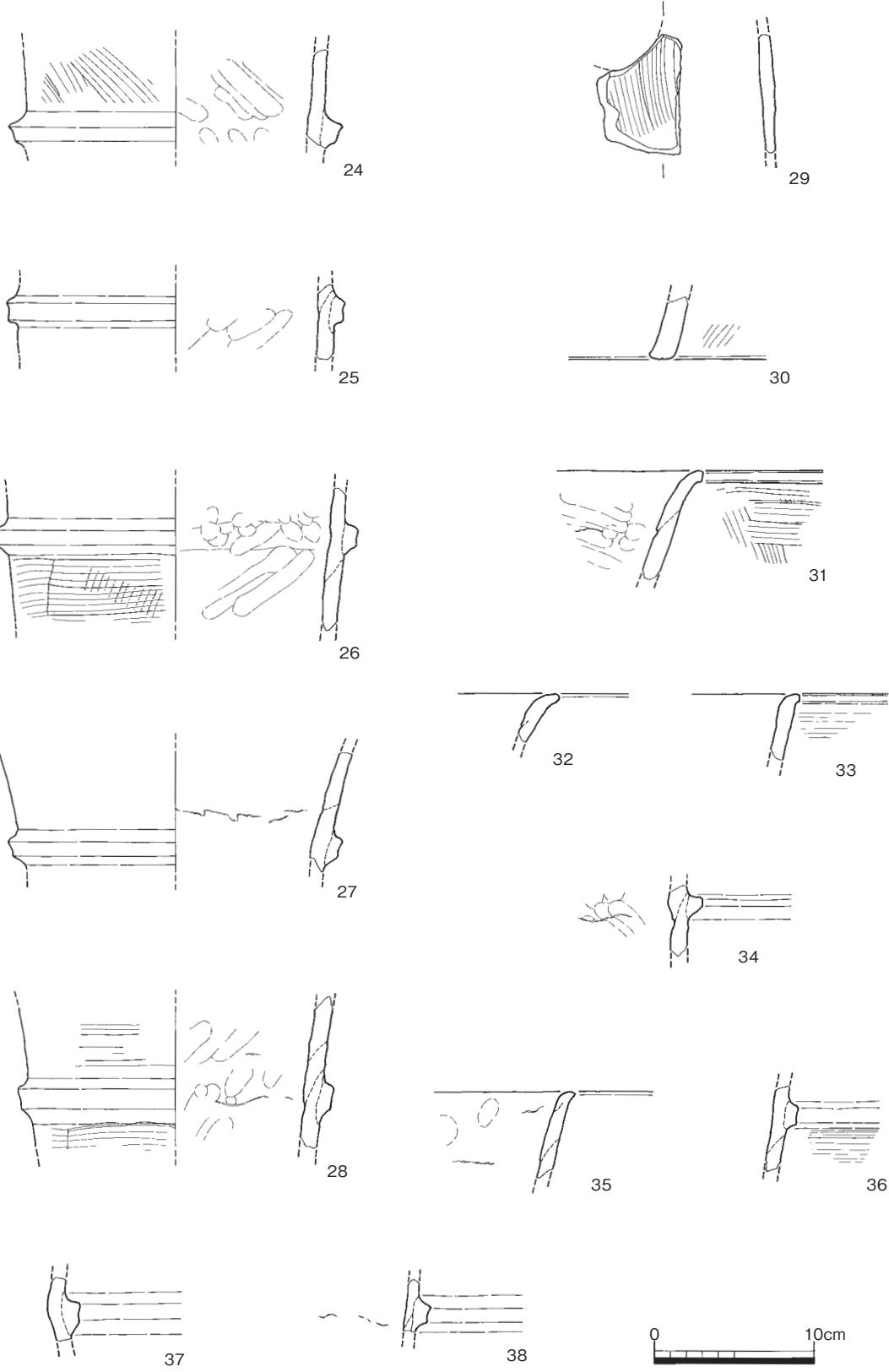
7はトレンチ3土坑状遺構から出土した土師皿である。器壁はローリングを受ける。口縁端部はごくわずかに欠損するが口径14.7cm、底径7.8cm、器高は2.7cmに復元できる。底部は糸切りである。



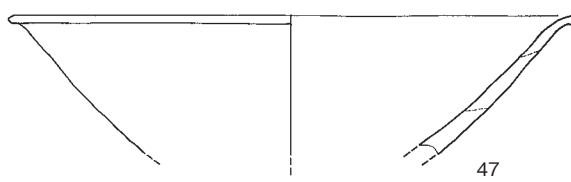
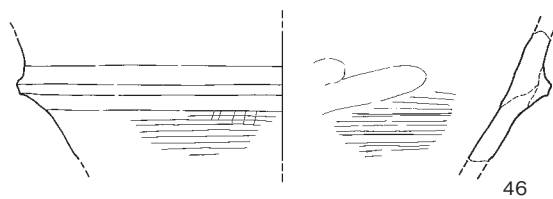
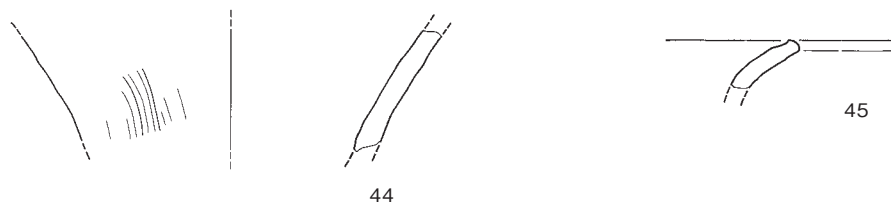
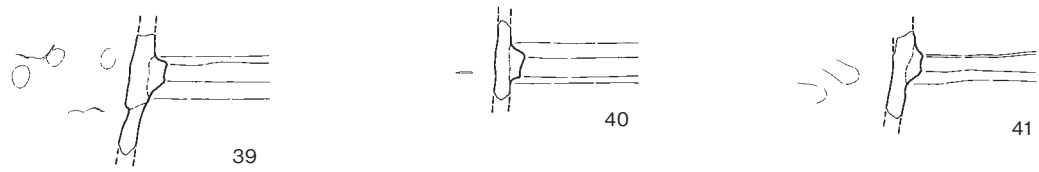
第 18 図 横隈山古墳出土円筒埴輪実測図① (S=1/4)



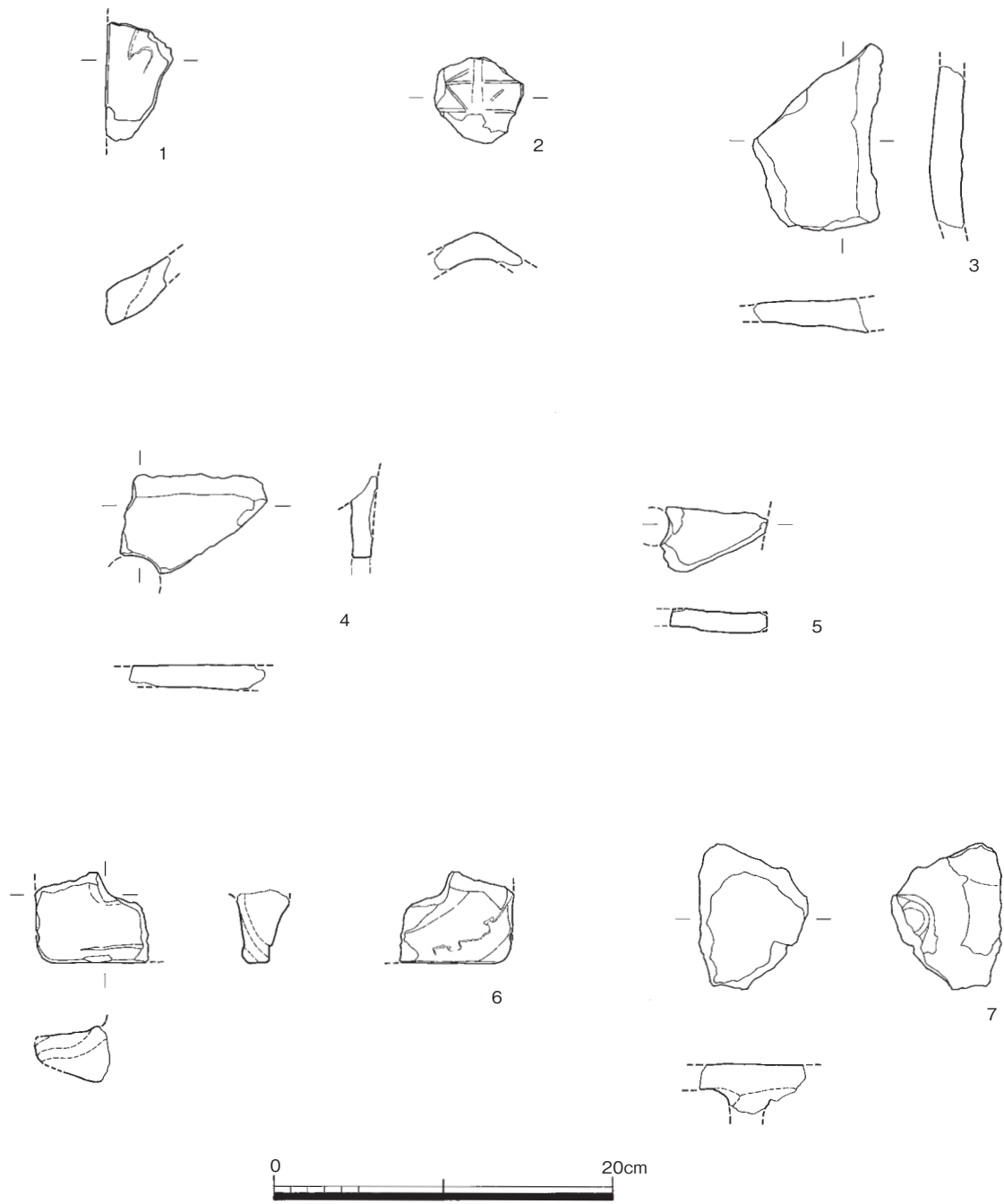
第 19 図 横隈山古墳出土円筒埴輪実測図② (S=1/4)



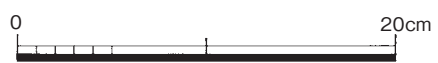
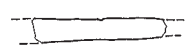
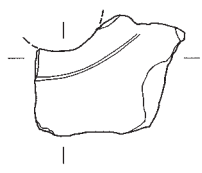
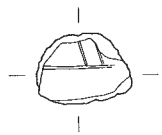
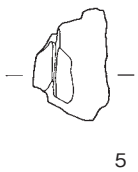
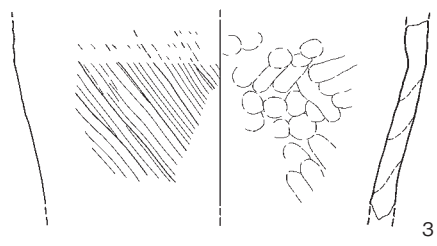
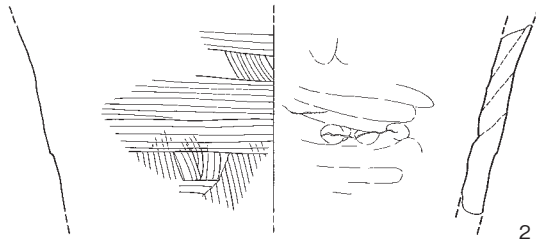
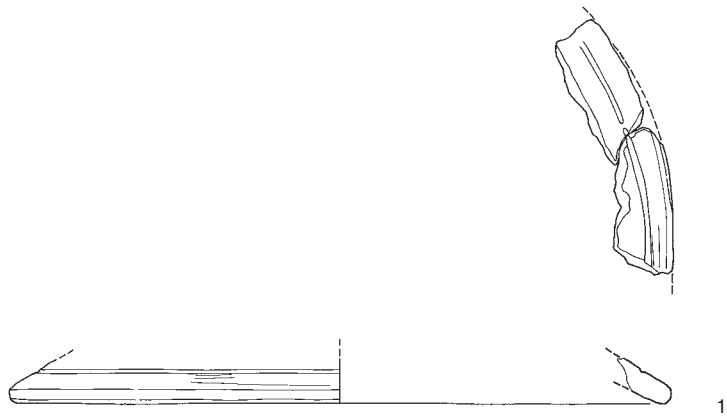
第 20 図 横隈山古墳出土土円筒埴輪実測図③ (S=1/4)



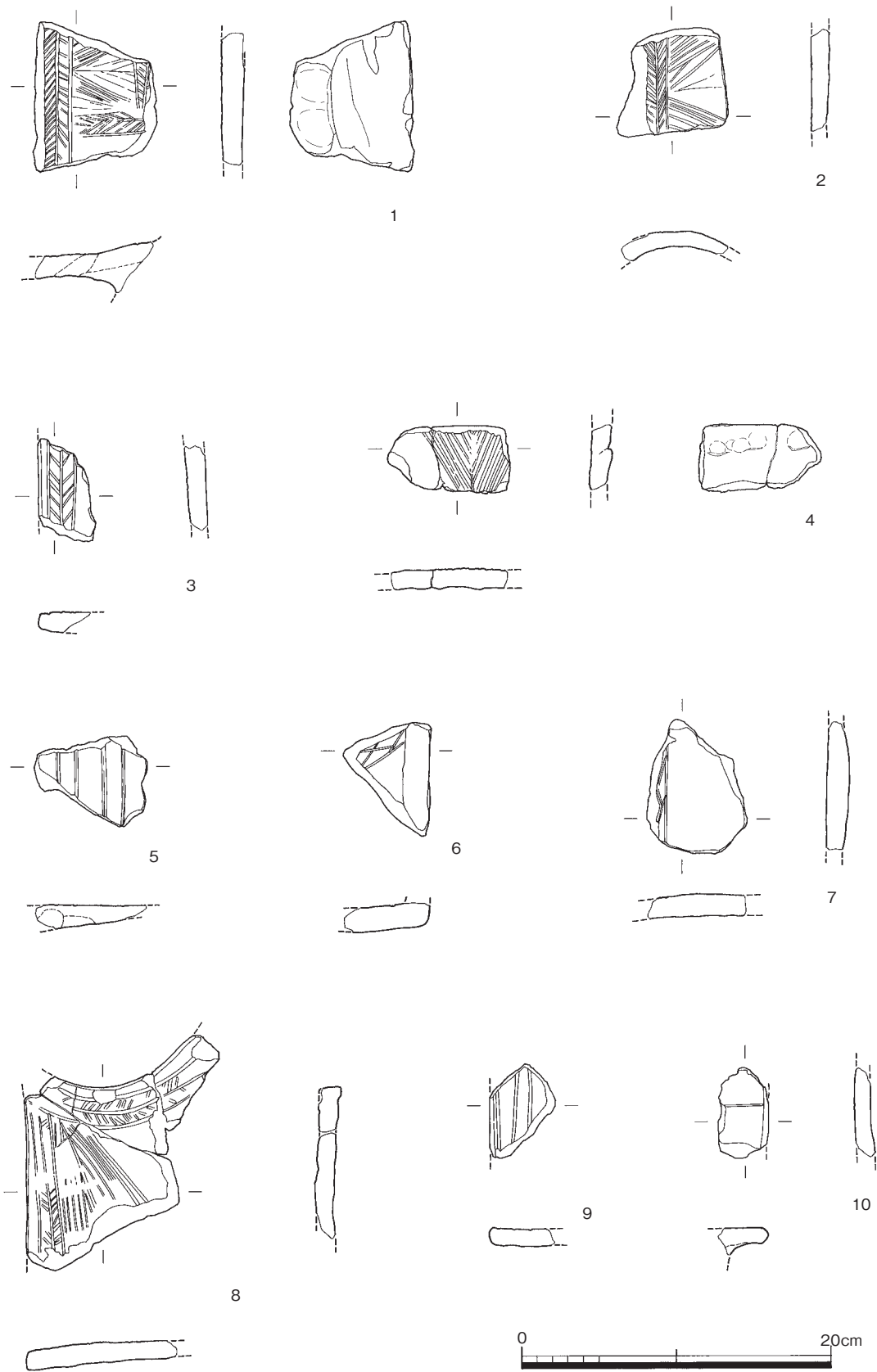
第 21 図 横隈山古墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図 (S=1/4)



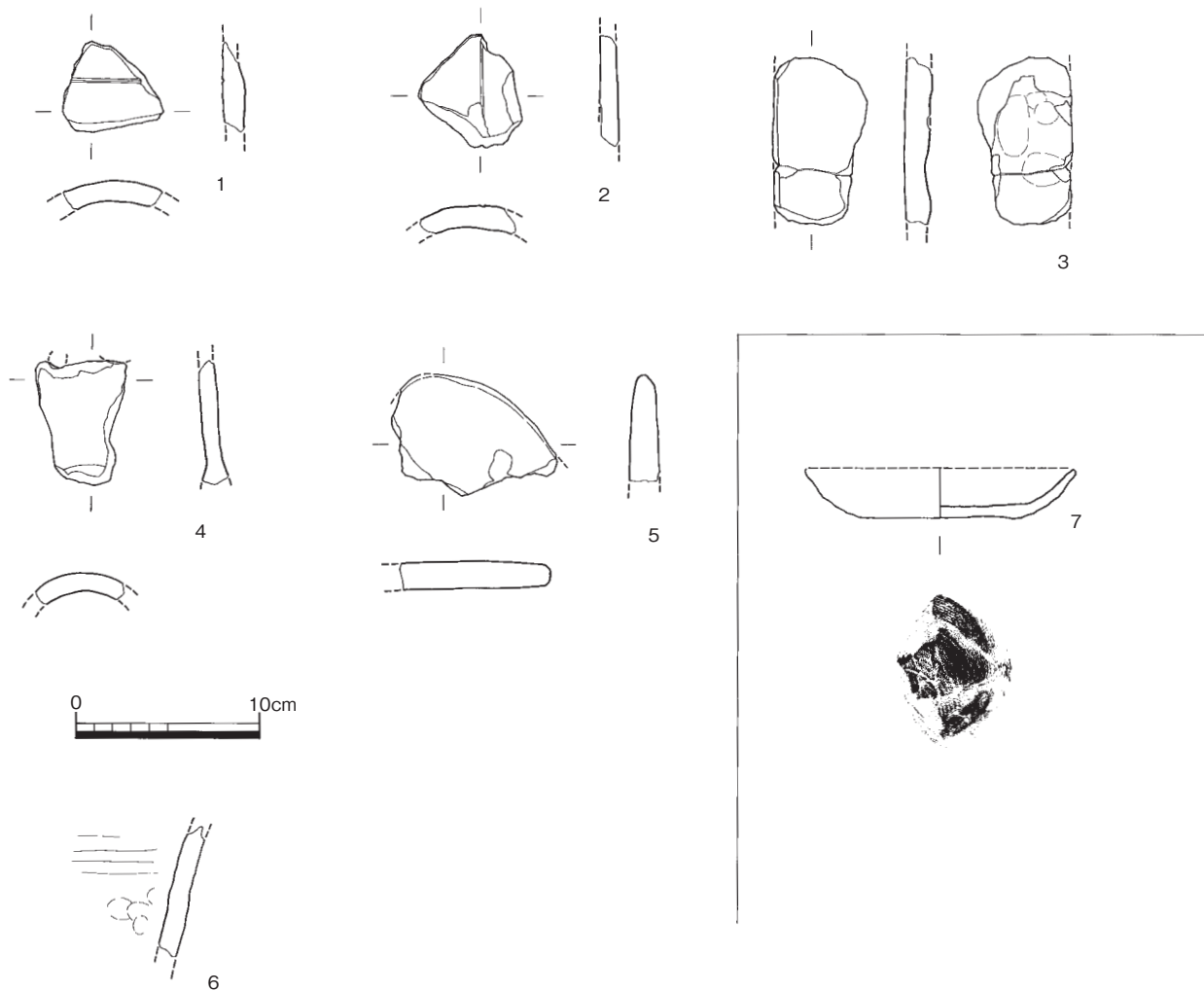
第 22 図 横隈山古墳出土家形埴輪実測図 (S=1/4)



第 23 図 横隈山古墳出土蓋形埴輪実測図 (S=1/4)



第 24 図 横隈山古墳出土盾形埴輪実測図 (S=1/4)



第 25 図 横隈山古墳出土不明形象・器財埴輪・土器実測図 (S=1/4)

第5章 まとめ

1. 墳丘について

規模および築造方法

調査の結果、横隈山古墳は全長 31.6m、後円部径約 23.1m、くびれ部幅 9.6m、前方部端は崩れているため正確な値は不明だが長さ約 10.5m、幅約 11.4m の規模を測ることが明らかとなった。各トレンチの土層観察の結果、墳丘は旧地表上に盛土によって構築されている。この旧地表は、弥生時代中期の遺物を包含する黒色土である。墳丘周囲にはやや歪な形状を呈す周溝を確認している。幅は前方部北側のみで明らかとなっており約 7.0m を測る。前方部西側では、緩やかなスロープ状のテラスが広がっている。墳裾から周溝にかけて緩やかに移行するため、周溝上端の判定は難しい。このテラスおよび周溝は旧地表および地山の削り出しである。

第 27 図に示す墳丘復元図は、築造規格を検討するため、後円部径を基準として一辺 11.55 m の方眼をあてている。この図では前方部裾が規格線に到達していないが、周溝下端がほぼ近い位置にあることから、見かけを大きく見せるために周溝下端を墳裾として意識した築造であった可能性が考えられよう。この意識は前方部西側に広がるテラスや北西側にやや突出した前方部端からもうかがえる。西側から見られることを意識したものであろう。周溝下場を墳裾と捉えた場合、墳丘規模は全長約 34.5m を測る。周溝は前方部と同様に北西側にせり出したプランが想定される。くびれ部周辺は地形に合わせてやや屈曲する復元ラインを示しているが、直線的なプランであった可能性も排除できない。復元プランが示せなかった箇所は、前方部上端と墳丘東側である。後円部と前方部の境には明瞭な地形変換点がみとれるが、前方部は盛土の流出が著しく本来の高まりが不明である。墳丘東側は調査箇所がトレンチ 4 のみであるため、推定ラインを一部しか示していない。

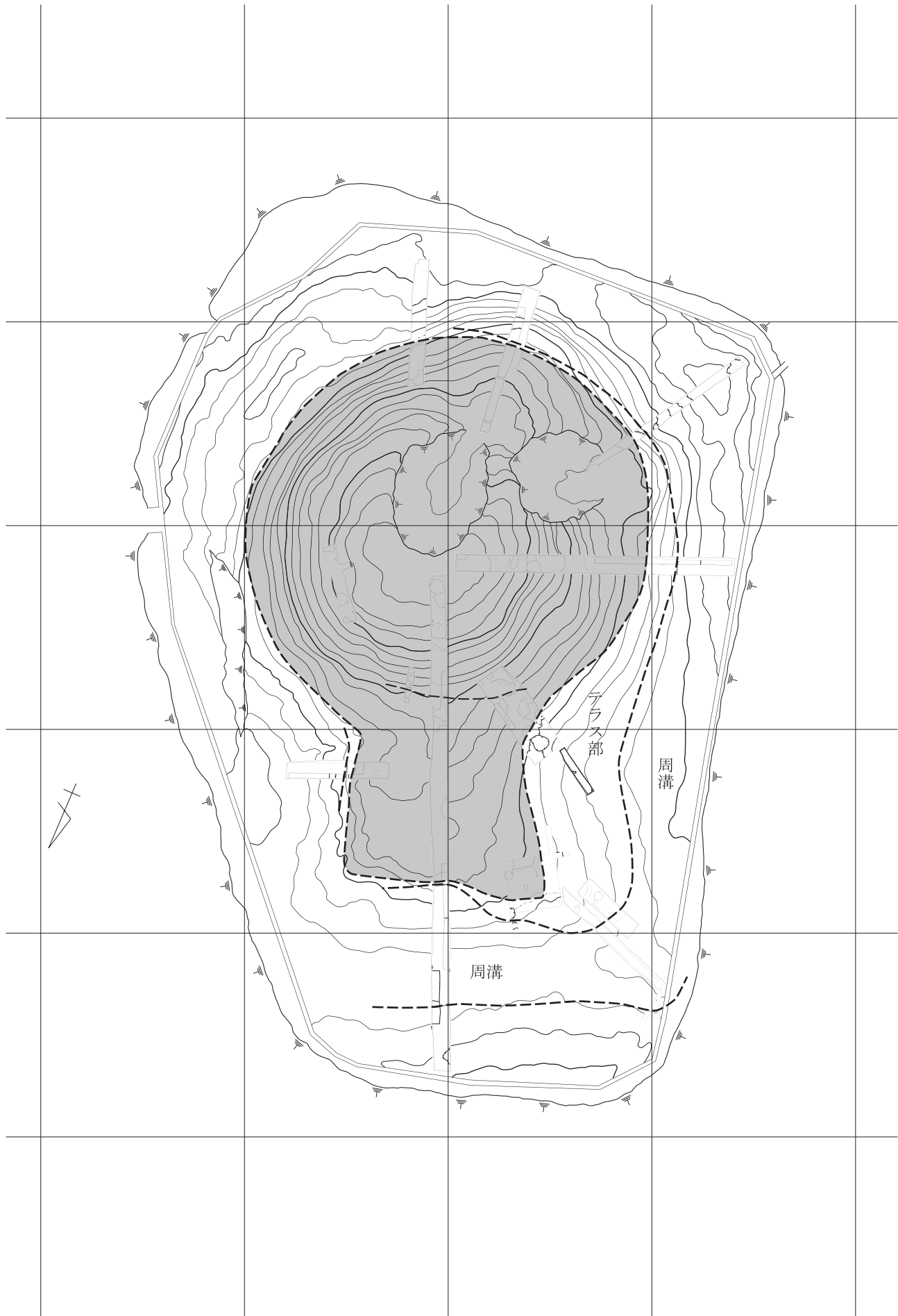
周溝プランは全形が不明であるが、盾形状を呈するものと考えられる。限られた範囲の調査ではあるが、周溝内部に土器供献は確認できなかった。埋土は墳丘盛土と同質で、ややしまりが弱く墳丘流出土が堆積しているものと考えられる。流水や滞水などの痕跡は確認できなかった。

前方部で確認された旧地表と後円部で確認された旧地表とでは約 50cm の標高差がある。墳丘中心部分は掘削していないため旧地表の標高は不明である。昭和 48 年の地形測量の結果から、旧地形は南北に長い尾根状となっており、舌状に突き出た突端部であったことから、南側に緩やかに傾斜する丘陵先端部の地形を利用して築造されたものと考えられる。

埋葬施設

埋葬施設が存在したと考えられる後円部南側は大きく盗掘を受けている。盗掘坑内部にも埋葬施設と考えられるものは確認できなかった。埋葬施設は構造、内容ともに不明である。トレンチ 10 の調査によって、盗掘坑の攪乱が想定された以上に深くまで及んでいることが明らかとなった。土層観察からは 2 回以上の攪乱を受けており、トレンチ 10 第 17 層には硬く踏みしめられたような痕跡もみられた。攪乱土中には出土遺物がみられず、盗掘を受けた時期も不明である。周辺住民から伺った話では、大正時代に「陸軍によって塹壕掘削の練習が行われていた」とのことである。しかしながら、今回の調査では塹壕掘削の痕跡や当時の遺物を確認できていないため、確証は得られなかった。

過去には「墳丘上には石室に使用された石材がみられ」（宮田 1996）たことから、主体部には竪穴系横口式石室か横穴式石室が採用されたものと想定されている。しかしながら、現在その石材は失われており確認できなかった。三国丘陵上に分布する古墳は、そのほとんどが盗掘を受け、さらに昭和初期に行なわれた井堰工事によって石を抜き取られたものも多い。本古墳も同様に石室石材が抜き取られたものと考えられる。



第 26 図 横隈山古墳墳丘復元図 (S=1/300)

2. 埴輪について

九州における円筒埴輪の本格的な採用は4世紀後半である。5世紀前葉から中葉にかけて埴輪の焼成に窖窯を用いるようになり、5世紀末から6世紀初頭になると2次調整ヨコハケが省略され、1次調整タテハケのみとなる段階へと移行することが知られている。

横隈山古墳から出土した埴輪は、いずれも小片であり、全容は明らかにできていない。

埴輪構成

横隈山古墳から出土した埴輪は、ほとんどが無黒斑であることから窖窯焼成によるものと考えられる。出土した埴輪の多くは円筒埴輪で、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪がみられる。一部馬形埴輪の可能性のあるものも出土している。トレンチ調査のため、出土した埴輪の多くが小片で全体像は不明であるが、これらが本古墳の埴輪構成である。以下、各構成埴輪の特徴を述べる。

円筒埴輪

出土したほとんどの円筒埴輪は、器壁が風化し外面調整は不明瞭なものが多い。調整が確認できるものは全て1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケが施される。円筒埴輪の法量は復元による推定ではあるが口径25cm、底径18cm前後になるものと考えられる。器高は突帯数を含め全容が明らかなものが出土していないため不明であるが、法量および器壁の傾きから2条3段もしくは3条4段程度と推測される。突帯間には径5cm前後を測る円形の透かし穴をもつものがみられる。製作技法、焼成による色調の差がみられるが、全体的に法量が揃っていることから、同一規格に則って製作されたものと推測される。

朝顔形埴輪

口縁部のみでしか判断できないため、円筒埴輪中に体部が混ざっている可能性がある。口縁部に円筒埴輪との調整の違いがみられ、口縁部内面にはヨコハケ調整を施した後、口縁端部はヨコナデ調整である。

トレンチ4出土の朝顔形埴輪は、器壁の薄さや調整技法の違いから壺形埴輪の可能性も排除できない。東側の周溝部埋土からの出土であり、本来の樹立位置は不明である。口縁部外面に黒斑が認められることから、焼成に失敗した可能性および窖窯焼成ではなく野焼き焼成の埴輪が本古墳に供給されていた可能性も考慮しなければならない。今後資料の増加にともなって、本古墳に供給された埴輪がすべて窖窯焼成であったのか再検討しなければならない課題である。

家形埴輪

家形埴輪はいずれも小片であり、全容は不明である。壁体部分と考えられる板状の埴輪片には円形の透かし穴をもつものがあり、円筒埴輪のものに比べ径は3.5cm前後と小さく、窓部分と考えられる。そのほか基壇部と考えられる破片が2点出土している。うち1点は赤色顔料が塗布されており、三沢蓬ヶ浦遺跡の埴輪窯で焼成されたものと色調・胎土が似る。もう1点は底部に円柱状の接合部がみられ、円柱をもつ建物に復元されることが想定される。このような円柱構造の柱をもつ家形埴輪は大阪府塚ノ本古墳、奈良県平城宮跡東院下層（4世紀後半）、大阪府玉手山1号墳（4世紀後半から5世紀初頭）や埼玉県瓦塚古墳（6世紀前半）出土品などに類例がみられる。赤色顔料は塗布されず、成形技法も異なっており、色調からも別個体と考えられ、少なくとも家形埴輪は2個体が樹立されていたものと考えられる。

盾形埴輪

盾形埴輪は、トレンチ1、10のほか表採を含め破片12点が出土した。各個体はほとんど接合しない

ものの、破片資料の文様構成から装飾文様は3条の沈線で区画した外区に綾杉文を配置し、綾杉文帯の内側には三角文を配置する。前面中央部分は資料が出土していないため不明である。綾杉文は左右対称でなく、各線が区画線に到達していないなど粗雑なものである。この文様構成は、精細さははるかに劣るが、塚堂古墳出土の盾形埴輪に似る。

蓋形埴輪

トレンチ1、2、盗掘坑で計4点が出土した。傘部で復元径35.2cmとなる。円筒部と傘部との接合部内面に粘土を補填するなどの特徴がみられる。同様の製作技法は塚堂古墳出土品にみられる。

その他の形象埴輪

馬形埴輪と考えられる個体が盗掘坑から1点、トレンチ4から1点出土した。それぞれ器壁の風化が著しいが、たてがみ部、脚部と想定される。他の部位が出土していないため、馬形埴輪であるか根拠に乏しい。脚部と想定される個体は臀部付近に円形の穿孔がみとめられる。

埴輪列

円筒埴輪列がトレンチ1の後円部墳頂で確認された。1m幅の中に円筒埴輪4個体がほぼ接して、密に並んでいる状態で検出された。これらはやや前方部側へ傾いているものの原位置を保っているものと考えられる。平成25年度の調査時に、後円部墳頂で露出していた埴輪片の位置を図面上にプロットし、その分布を明らかにした(第27図)。後円部墳頂南側は盗掘など攪乱による墳丘盛土の流出が著しく、元位置を保っているものはほとんどみられない。北から東側にかけては、円筒埴輪と確認できるものが表土に露出しており、円筒埴輪列の位置を示しているものと考えられる。この円筒埴輪の分布、トレンチ1で検出された円筒埴輪列の配置間隔から、後円部墳頂には、約100個体の円筒埴輪が密に樹立されていたものと推定される。

各トレンチから出土した埴輪器種と出土数の傾向から、後円部墳頂埴輪列は円筒埴輪を中心として、朝顔形埴輪を少数配置するようである。また埴輪の出土地点を検討した結果、埴輪列もしくはその内側に家形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪を樹立していたものと考えられる。

今回の調査では出土していないが、周辺地域にみられる人物埴輪が樹立されていた可能性は十分考えられる。後円部墳頂円筒埴輪列および横隈山古墳に樹立された埴輪構成要素を推定できる材料がえられたことは、貴重な成果であった。

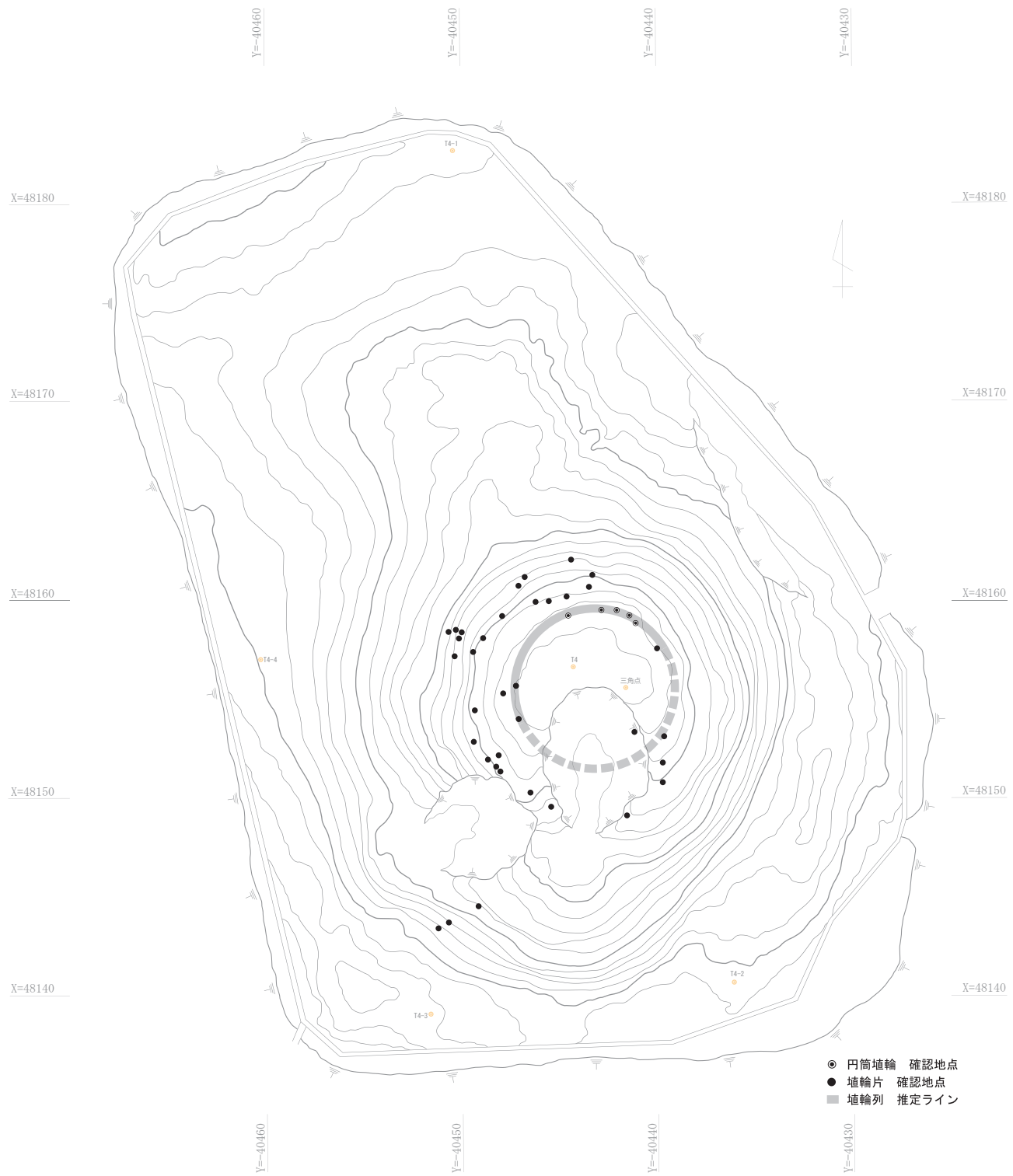
埴輪窯について

横隈山古墳から出土する家形埴輪には、胎土や調整、色調、器壁の厚さ、表面に赤色顔料が塗布されたものが見られ、三沢蓬ヶ浦遺跡の埴輪窯出土家形埴輪と共通点が多く、この窯で焼成されたものである可能性が考えられる。この埴輪窯は、土層観察の結果、焼成は一度のみと考えられており、使用期間は、地磁気残留測定法によって、 440 ± 25 (415 ~ 465) 年という年代観が与えられている。しかしながら、三沢蓬ヶ浦遺跡の埴輪窯の規模から1基の窯で横隈山古墳全ての埴輪を焼成したとは考えにくい。

今回の調査では三沢蓬ヶ浦遺跡出土例とは色調や調整が異なり、赤色顔料の塗布されない家形埴輪が出土している。円筒埴輪についても色調や調整の異なるものが出土している点からも三沢蓬ヶ浦遺跡の埴輪窯以外に別の窯が存在した可能性は十分に考えられよう。

3. 築造時期について

ここでは、横隈山古墳の墳丘形態および出土埴輪から古墳の築造時期について検討する。本古墳の特徴として、窖窯焼成の埴輪を有すること、後円部墳頂に円筒埴輪列を樹立すること、家形埴輪、盾形埴



第 27 図 横隈山古墳埴輪列復元図 (S=1/300)

輪、蓋形埴輪を有する点が挙げられる。また、須恵器の出土がほとんどみられない点も特徴として挙げられる。古墳の築造時期は埋葬施設の構造や副葬品等の出土遺物から推定すべきであるが、本古墳の埋葬施設や副葬品は失われており、築造時期を示す資料は埴輪のみである。よって、周辺地域における出土遺物の豊富な古墳出土埴輪と比較し、本古墳の築造時期を検討する。本古墳から出土した円筒埴輪は、窖窯焼成で無黒斑である点、基底部に2次調整ヨコハケを残す点が特徴として挙げられる。調整技法および窖窯焼成による無黒斑の埴輪である点から川西編年Ⅳ期に該当する。北部九州においては5世紀前葉から中葉にかけて窖窯による埴輪の焼成が始まることが知られており、本古墳はこれ以降の築造時期が与えられる。

まず、横隈山古墳で出土した円筒埴輪の特徴として挙げられるのが口縁形態である。口縁部を外側に強く屈曲させる円筒埴輪は、周辺では朝倉市古寺1号墳、堤当正寺古墳、うきは市塚堂古墳、太宰府市成屋形古墳などに見られ、大分県大在古墳や宮崎県下の古墳からも出土しているが、5世紀代に北筑後地域を中心に分布する傾向がみられる。古寺1号墳の円筒埴輪は資料数が少ないが、基底部には2次調整ヨコハケが施される。堤当正寺古墳出土の円筒埴輪は2次調整ヨコハケを施すものは半数で2次調整が形骸化していく過程を示している。成屋形古墳は、後円部墳頂に埴輪列をめぐる。出土埴輪はいずれも無黒斑で基底部は2次調整ヨコハケをほとんど省略するが、一部残すものもみられる。5世紀後半でも古い段階に位置づけられている。成屋形古墳は墳丘形態が久留米市御塚古墳と類似する。御塚古墳出土の円筒埴輪は最上段、基底部ともに2次調整ヨコハケを省略しており、2次調整の形骸化がみられる。5世紀後半でも新しい段階に位置づけられている。塚堂古墳出土の円筒埴輪は基底部の2次調整は省略されるが、最上段は2次調整ヨコハケを残すものがみられる。

最も特徴的な内側に屈曲する口縁部をもつ円筒埴輪（第18図5）であるが、周辺地域ではうきは市月岡古墳に出土例がみられる。月岡古墳出土の埴輪は全て無黒斑で土師質である。円筒埴輪は基底部に2次調整ヨコハケを残す。蓋形埴輪の線刻文様は傘部をめぐる沈線と直行する2～3本の区画線などに横隈山古墳出土品との共通点がみられる。築造時期は出土遺物から5世紀前半～中頃と考えられている。この月岡古墳に後続する塚堂古墳は5世紀後半の築造と考えられている。出土埴輪は無黒斑で若干量の須恵質を含む。円筒埴輪は基底部2次調整ヨコハケを省略する。蓋形埴輪は円筒部と傘部との接合部に粘土を補填するなど横隈山古墳出土埴輪と製作技法に共通点がみられるが、傘端部を粘土で肥厚させる点や傘部の外面調整にハケメが施されるなどの点に差異がみられる。

筑紫野市諸田仮塚1号墳は、横隈山古墳から北西4.7kmに位置する径約20mの円墳である。墳丘は削平されているが、周溝は残りの良い部分で幅6.5mを測り、墳丘に対して幅広の周溝をもつ。出土した埴輪は窖窯焼成で無黒斑である。一部土師質であるが、須恵質のものを多く含む。基底部の2次調整ヨコハケは省略される。出土した須恵器から5世紀中頃前後の築造と考えられている。ただし、円筒埴輪口縁端部の形状は、周辺地域に見られる口縁端部を外側に屈曲させる円筒埴輪との共通点はみられない。異なる系譜の工人集団による製作と考えるべきで、単純な時期の比較対象とはなりえない。

上記の結果から、横隈山古墳の築造時期は月岡古墳以降で、塚堂古墳や成屋形古墳よりも古く、5世紀中頃前後段階と推定される。これは横隈山古墳に供給された埴輪を焼成した三沢蓬ヶ浦遺跡埴輪窯の地磁気残留測定法で得られた 440 ± 25 年の範疇に収まるものである。5世紀第2四半期後半から第3四半期前半という築造時期があたえられよう。

4. 横隈山古墳の性格について

横隈山古墳出土埴輪は、月岡古墳にみられる特異な口縁形態の円筒埴輪や蓋形埴輪の線刻文様、塚堂古墳にみられる盾形埴輪の文様構成、蓋形埴輪の成形技法などに類似点が見出せ、これらと同一系譜をもつ埴輪製作工人が横隈山古墳の埴輪製作に携わっていたことを示唆している。三沢蓬ヶ浦遺跡の埴輪窯から出土した家形埴輪には片流れ造りの屋根がみられ、倭王権中枢との関係が深いことを示唆しており特筆される。

月岡古墳の埋葬施設には竪穴式石室・長持形石棺が採用されたが、続く塚堂古墳には横穴式石室が採用され、月岡古墳と比べ畿内色を薄め、在地化していく段階と捉えられており、これには筑紫君の影響がおよんだ結果と考えられている。この月岡古墳、それに続く塚堂古墳の影響がおよんだ勢力圏としては、月岡古墳副葬品と共通性が見出せる甲冑類が出土した志波宝満宮、甲冑類、胡縁が出土した堤当正寺古墳、甲冑類、環鈴、馬具、初期須恵器が出土した小田茶臼塚古墳といった首長墳が時期的に重なり、これらの甲冑類や馬具が月岡古墳を中心とした勢力からの配布であったことが想定されている。あわせて5世紀中頃をはさんだこの時期には横隈山古墳の周辺地域に上記の堤当正寺古墳、小田茶臼塚古墳に加え、小隈古墳が築造されている。これらの首長墓は朝倉窯の操業期間内に築造されていることから、須恵器生産を掌握した在地首長の墓と捉えられている。この朝倉産初期須恵器の供給と流通を担った地域首長が、月岡古墳、塚堂古墳を中心とした勢力から甲冑や馬具を配布され、地域首長層の共同体として連結、勢力圏を拡大していく過程がうかがえる。堤当正寺古墳と小田茶臼塚古墳、小隈古墳の墳丘形態に類似性が見られる点も示唆的である。しかしながら、横隈山古墳は埋葬施設や副葬品が失われているため、これら首長層との関係性を見出すことは現段階では不可能である。

小郡地域には、この時期横隈山古墳以外に首長墓として挙げられるものはみられず、横隈山古墳被葬者が小郡地域一帯を掌握していた首長であったと考えられる。当該期の集落は少なく展開は限られているが、5世紀段階から集落形成が始まる三沢栗原遺跡。5世紀後半代の三国の鼻遺跡などのほか、滑石製品の製作工房が確認された西島遺跡、またその供給先である伊勢山遺跡からは朝鮮半島系の高坏が出土している。これら滑石製品の製作技術が渡来系集団によってもたらされた可能性は十分に考えられよう。このことは西島遺跡周辺でも花聳2号墳から出土した板状鉄製品ともいえる大型の鉄鋌、花聳1号墳、横隈狐塚遺跡で出土したU字形鋤先、さらに西島遺跡や三国の鼻遺跡Vなどで確認されたカマドなど、花聳古墳の築造された5世紀前半までは確実に朝鮮半島との交流が活発であったことがうかがえる。横隈鍋倉遺跡の初期横穴墓からも朝鮮半島のみならず、東北部九州との交流も盛んに行なわれていたことがうかがえる。これら対外交渉による先進技術の受容を弥生時代以降、先進的に続けていた小郡地域の首長層が、月岡古墳、塚堂古墳を中心とした勢力の一端を担い、横隈山古墳の首長もその地域首長層の共同体に組み込まれたのではないだろうか。

参考文献

- 高橋徹 1976「九州の埴輪概観」『二子塚遺跡』久留米市開発公社
- 柴田泰典・渡辺正気 1962「福岡県三井郡小郡町花聳発見の一箱式小石室」『九州考古学』16
- 大野由美子 2006「愛媛県の盾形埴輪 -小竹8号墳・樹之本古墳出土の資料について-」『紀要愛媛』第6号
- 竹中克繁 2004「九州壺形埴輪研究序論 -壺形埴輪の変遷とその意義-」『熊本古墳研究』第2号
- 池田 計彦 2006「円筒埴輪の研究—壺系列を中心に—」『奈良大学大学院研究年報』Vol.11号, p.75-77 奈良大学大学院
- 中島和彦 1991「『断続ナデ技法』の再評価」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』
- 坂靖 1985「埴輪編年と技法伝播の問題」『同志社大学考古学シリーズⅡ考古学と移住・移動』
- 井上勇也、加藤和歳 2007『県指定史跡 伊方古墳 保存整備・事前調査報告書』福智町教育委員会
- 株式会社 中桐造園設計研究所 2003『沖出古墳公園整備事業報告書』稲築町
- 福岡大学 考古学研究室（筈瀬明宏、境靖紀、奥村俊久、佐藤史崇、武末純一、羽方誠、中野聡子、甲斐孝司、是田敦、小野恵美子、池松幸路、佐藤信、西山めぐみ、早川晃代、平尾和久、小田富士雄、福海愛子）編 1998『国史跡 五郎山古墳 -保存整備事業に伴う発掘調査-』筑紫野市教育委員会
- 児玉真一 2005「月岡古墳の構築時期、性格と後継」『若宮古墳群Ⅲ』吉井町文化財調査報告書第19集
- 柳田康雄・小川泰樹・杉原敏之・岸本圭 1998『一般国道3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集 諸田仮塚遺跡』（福岡県教育委員会）
- 宮田浩之 1996「前方後円墳の消滅」『小郡市史 第1巻』小郡市教育委員会

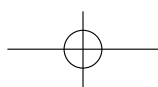
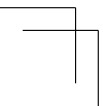
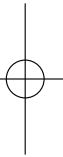
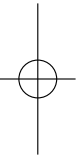
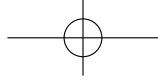
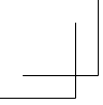
第1表 出土埴輪・土器観察表

器種=円筒：円筒埴輪、朝顔：朝顔形埴輪、家：家形埴輪、蓋：蓋形埴輪、盾：盾形埴輪、不明：不明形象・器財埴輪
 法量=口：口縁、高：器高、底：底径、突上：突带上位径、厚：器壁厚さ、()は復元径

出土遺構	挿図番号	図版番号	器種	法量cm(復元径)	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考	
トレンチ1	第18図1	図版11	円筒	突上:(17.0) 厚:0.95~1.3	内外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ヨコナデか 外:タテハケ		
トレンチ2	第18図2	図版11	円筒	突上:(23.1) 厚:1.1	内:にぶい橙 外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ナデ 外:ナデ 突:ヨコナデ	粘土帯の単位狭い	
	第18図3	図版11	円筒	突上:(19.5) 厚:0.9~1.0	内外:明赤褐	7mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指ナデ、ナデ 外:ヨコハケ 突:ヨコナデ	外面にヘラ記号かヨコハケ後突帯貼り付け	
	第18図4	図版13 5・6	円筒	突上:(19.4) 厚:1.2~1.45	内:明赤褐 外:橙	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ 突:ヨコナデ	突帯下位に刺突痕か	
トレンチ1	後円部墳頂	第18図5	図版13 1	円筒	厚:0.6~0.7	内外: にぶい赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口:ヨコナデ 体:内:指オサ工後指ナデ 外:斜め方向のハケメ	口縁端部が内側に屈曲する特異な形態ただし小片のため調整による器形の歪みの可能性あり
	後円部墳頂	第18図6	図版11	円筒	厚:0.7~0.95	内:橙 外:明赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:ナデか 外:ヨコハケ 突:ヨコナデ	円形透かし穴あり
	後円部墳頂	第18図7	図版11	円筒	厚:1.05~1.2	内:にぶい赤褐 外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ハケ状工具によるナデか 外:不明瞭	器壁荒れ調整不明瞭
トレンチ2	第18図8	図版11	円筒	厚:0.9	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指オサ工後ナデ 外:タテハケ		
	第18図9	図版13 2	円筒	厚:0.7~0.8	内:明赤褐 外:にぶい赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ナデか 外:タテハケ		
	第18図10	図版11	円筒	厚:0.7	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ナデか 外:ナデか 突:ヨコナデ	内外面ともに磨耗し調整不明瞭	
	第18図11	図版11	円筒	厚:0.7~0.95	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指ナデ 外:ナデ 突:ヨコナデ		
	第18図12	図版11	円筒	厚:0.7~0.85	内外:橙	4mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指ナデ 外:タテハケ 突:ヨコナデ	器壁磨耗し調整不明瞭	
	第19図13	図版11	円筒	突上:(20.4) 厚:0.8~0.9	内外:明赤褐	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:ナデ、指ナデ 外:調整不明瞭 突:ヨコナデ		
トレンチ3	最下層	第19図14	図版13 4	円筒	突上:(19.8) 厚:0.6~0.9	内外:橙	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ナデか 外:ヨコハケ 突:ヨコナデ	円形透かし穴あり風化著しく外面調整不明瞭
	上層	第19図15	図版11	円筒	底:(15.8) 厚:1.3~1.7	内:にぶい赤褐 外:明赤褐	8mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指オサ工後指ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ	底部外面に粘土貼り付けにより肥厚させる
トレンチ4	第19図16	図版11	円筒	突上:(21.0) 厚:1.0~1.3	内外:明赤褐	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指ナデ 外:タテハケ 突:ヨコナデ	円形透かし穴あり	
	第19図17	図版11	円筒	突上:(21.2) 厚:1.0~1.2	内外:にぶい赤褐	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指オサ工後ナデ 外:ヨコナデか 突:ヨコナデ	円形透かし穴あり器壁外面荒れ、調整不明瞭	
トレンチ3	下層	第19図18	図版11	円筒	厚:0.8~0.95	内・外:橙	2mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	体:内:指ナデ 外:不明瞭 突:ヨコナデ	
	最下層	第19図19	図版11	円筒	厚:0.75~0.95	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ナデ 外:ナデ 突:ヨコナデ	内外面ともに磨耗し調整不明瞭
	最下層	第19図20	図版13 7・8	円筒	底:一 厚:1.0~1.7	内:橙 外:明赤褐	4mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指オサ工後板ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ	内面は板ナデ痕がハケメ状に残る
トレンチ4	第19図21	図版11	円筒	厚:1.0~1.2	内:にぶい橙 外:橙	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指ナデ後指オサ工 外:タテハケ 突:ヨコナデ	円形透かし穴あり	
	第19図22	図版11	円筒	厚:0.9~1.05	内:にぶい赤褐 外:明赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指ナデ、指オサ工 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ 突:ヨコナデ		
	最下層	第19図23	図版11	円筒	厚:1.0~1.3	内外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指ナデ、指オサ工 外:タテハケ 突:ヨコナデ	ヨコハケ後突帯貼り付け
トレンチ5	第20図24	図版11	円筒	突上:(18.6) 厚:0.8~0.9	内外:橙	4mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指オサ工後指ナデ 外:斜め方向のハケメ 突:ヨコナデ		
トレンチ6	第20図25	図版11	円筒	突上:(19.0) 厚:1.0	内外:橙	4mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指ナデ 外:ヨコナデ 突:ヨコナデ		
トレンチ10	上層	第20図26	図版11	円筒	突上:(21.0) 厚:0.75~1.0	内外:橙	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指オサ工、指ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ 突:ヨコナデ	2次調整ヨコハケ後突帯貼り付け
	第20図27	図版11	円筒	突上:(20.0) 厚:0.9~1.0	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:ナデ 外:ヨコハケ 突:ヨコナデ	体部突帯接合面にタテハケが残る。器壁荒れ調整不明瞭	
	第20図28	図版11	円筒	突上:(18.6) 厚:1.0~1.1	内:橙 外:明赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ 突:ヨコナデ	外面ハケメの単位不明瞭	
トレンチ5	第20図29	図版11	円筒	厚:0.6~0.85	内外:橙	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指ナデか 外:タテハケ	円形透かし穴あり	
	第20図30	図版11	円筒	底:一 厚:1.25~1.35	内:明赤褐 外:橙	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	体:内:指ナデか 外:タテハケ	底部に工具混	
トレンチ6	第20図31	図版11	円筒	厚:0.8~1.0	内:明赤褐 外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指オサ工後指ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ		
	第20図32	図版11	円筒	厚:0.7~0.9	内外:明赤褐	3mm以下の砂粒をやや多く含む 金雲母をわずかに含む	良好	体:内:ナデ 外:ヨコハケか	器壁風化し調整不明瞭	
	第20図33	図版11	円筒	厚:0.9~0.95	内外:橙	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:ヨコナデか 外:ヨコハケか	著しい風化のため調整不明瞭口径21cm前後か	

出土遺構	挿図番号	図版番号	器種	法量cm(復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考	
トレンチ6		第20図34	図版11	円筒	厚:1.0~1.2	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指ナデ 外:ヨコハケ 突:ヨコナデ	
トレンチ7	延長部	第20図35	図版11	円筒	厚:0.8~0.9	内外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指オサ工後ナデ 外:ナデ	著しい風化のため調整不明 口径26cm前後か
	延長部	第20図36	図版11	円筒	厚:0.9	内:にぶい赤褐 外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ナデ 外:ヨコハケ 突:ヨコナデ	ヨコハケ後突帯貼り付け
トレンチ10	上層	第20図37	図版11	円筒	厚:0.9	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指ナデ 突:ヨコナデ	
		第20図38	図版11	円筒	厚:0.6~0.7	内:明赤褐 外:橙	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:ナデ 外:ナデ 突:ヨコナデ	
	下層	第21図39	図版11	円筒	厚:0.8~1.1	内:橙 外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指オサ工後ナデ 外:ナデ 突:ヨコナデ	突帯の歪み大きい
	下層	第21図40	図版11	円筒	口:- 厚:0.65~0.8	内外:明赤褐	7mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内外:ナデ 突:ヨコナデ	
	下層	第21図41	図版11	円筒	厚:0.8~0.95	内外:橙	2mm以下の砂粒をごくわずかに含む	良好	体:内:指ナデ 外:ナデ 突:ヨコナデ	
盗掘坑		第21図42	図版12	円筒	厚:1.0~1.1	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指ナデ 外:ヨコナデ 突:ヨコナデ	風化のため調整不明瞭
		第21図43	図版12	円筒	厚:0.9~1.2	内外:明赤褐	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指ナデ 外:調整不明 突:ヨコナデ	朝顔形埴輪か
トレンチ1		第21図44	図版11	円筒	厚:0.95~1.05	内外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ 突:ヨコナデ	器壁外面一部剥離
		第21図45	図版13 3	朝顔	厚:0.7~0.9	内:外:橙	4mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	口:ヨコナデ 体:ナデ	内外ともに風化が著しく 調整不明瞭壺形埴輪か
トレンチ3	上層	第21図46	図版11	朝顔	突上:(27.6) 厚:1.0~1.1	内:橙 外:明赤褐	5mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内:指ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ 突:ヨコナデ	突帯はヨコハケ後貼り付け
トレンチ4		第21図47	図版11	朝顔	口:(30.0) 厚:0.4~0.95	内:橙 外:にぶい橙	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体:内外:調整不明	外面黒斑 著しい風化のため調整不明 壺形埴輪か
トレンチ12		第21図48	図版12	朝顔	口:(26.0) 厚:0.7~1.1	内:にぶい赤褐 外:明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む 金雲母をやや多く含む	良好	内:ヨコハケ、ナデ 外:調整不明	外面は器壁剥離のため調整不明
トレンチ10		第22図1	図版15 1	家	厚:1.9~2.1	内:外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:ナデ 外:ナデ	赤色顔料が部分的に残存する
盗掘坑		第22図2	図版12	家	厚:1.0~1.55	内外:橙	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	人物埴輪の可能性あり 外面に線刻
トレンチ10	上層	第22図3	図版11	家	厚:1.1~1.9	内外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:指ナデ 外:ヨコナデ	接合面から剥離カーブが強く 全容不明家形埴輪ではない 可能性がある
盗掘坑		第22図4	図版12	家	厚:1.2~1.45	内:明赤褐 外:にぶい赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指オサ工後ナデ 外:ナデ	円形透かし穴あり家形埴輪 輪壁、窓部分か
		第22図5	-	家	厚:1.0~1.2	内:外:橙	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:指ナデ、指オサ工 外:ナデ	円形透かし穴あり
表採		第22図6	図版14 5・6	家	-	内:にぶい橙 外:にぶい赤褐	4mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	内:ナデ 外:ヨコナデ	外面に赤色顔料が残る
		第22図7	図版14 7・8	家	厚:1.05~1.3	内外:橙	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指ナデ 外:ナデ	家形埴輪基壇部か器壁は 風化し調整不明瞭円柱が 付属するタイプか
盗掘坑		第23図1	図版15 3	蓋	厚:1.1~1.2	内外:明赤褐	5mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内外:ナデ	ヘラ状工具による沈線が めぐる
トレンチ4		第23図2	図版11	蓋	体:(27.2) 厚:1.1~1.3	内外:明赤褐	7mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指オサ工後指ナデ 外:1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ	蓋形埴輪円筒部か
		第23図3	図版15 4	蓋	厚:1.0~1.2	内:にぶい橙 外:橙	3mm以下の砂粒を少し含む 金雲母をわずかに含む	良好	内:指オサ工後指ナデ 外:斜め方向のハケメ、ヨコナデ	蓋形埴輪円筒部か
トレンチ2		第23図4	図版15 2	蓋	-	内:外:明赤褐	5mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:ヨコナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	円筒部との接合部に粘土 充填
		第23図5	-	蓋	-	内:外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:ヨコナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	円筒部との接合部に粘土 充填
トレンチ1	後円部墳頂	第23図6	-	蓋	厚:0.7~1.0	内:外:橙	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:ナデ 外:ナデ	傘部か
	後円部墳頂	第23図7	図版15 5	蓋	厚:1.0~1.3	内:明赤褐 外:にぶい赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指ナデ 外:ナデ	円形透かし穴あり蓋形埴輪 傘部か
		第24図1	図版14 1・2	盾	厚:1.2~1.75	内外:橙	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指ナデ後ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	端部に綾杉文帯、内側に 三角文を配置する
		第24図2	図版14 3	盾	厚:0.95~1.2	内外:橙	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	第24図1と同一個体か
		第24図3	図版11	盾	厚:1.0~1.3	内外:明赤褐	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	綾杉文帯が施される盾形 埴輪端部
後円部墳頂	第24図4	図版11	盾	厚:1.1~1.3	内外:橙	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指オサ工、ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	三角文が施される	
トレンチ10		第24図5	図版11	盾	厚:0.85~1.55	内:外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:指ナデ、ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	4条の線刻あり
表採		第24図6	図版15 6	盾	厚:1.7~1.85	内:にぶい橙 外:橙	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	線刻あり
トレンチ10	下層	第24図7	図版11	盾	厚:1.3~1.5	内:外:橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:指ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	線刻がみられるが文様不明
トレンチ1		第24図8	図版14 4	盾	厚:1.1~1.4	内外:橙	7mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:指ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	綾杉文と放射状の線刻 靱形埴輪か
		第24図9	図版11	盾	厚:1.0~1.1	内:明赤褐 外:橙	6mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:指ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	3条の線刻あり綾杉文帯 か

出土遺構		挿図 番号	図版 番号	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
盗掘坑		第24図 10	図版12	盾	厚:1.0~1.1	内:明赤褐 外:にぶい橙	2mm以下の砂粒を少し含む 金雲母をわずかに含む	良好	内:指オサエ後ナデ 外:ナデ後ヘラ状工具による線刻	小型品
トレンチ1	後円部墳頂	第25図 1	図版11	不明	厚:1.1	内:橙 外:明赤褐	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指ナデ 外:板ナデか、ヘラ状工具による線刻	盾形埴輪前面部か
	後円部墳頂	第25図 2	図版11	不明	厚:1.0~1.3	内:にぶい橙 外:明赤褐	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指ナデ 外:ナデ	1条の線刻あり
盗掘坑		第25図 3	図版12	不明	厚:1.1~1.35	内外:橙	3mm以下の砂粒を少し含む	良好	内:指ナデ。指オサエ 外:ナデ	板状の埴輪片家形埴輪 壁部分か
トレンチ4		第25図 4	図版11	不明	厚:0.8~1.3	内:にぶい橙 外:橙	1mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指ナデか 外:ナデ	馬形埴輪脚部か
盗掘坑		第25図 5	図版12	不明	厚:1.0~1.65	内・外:橙	2mm以下の砂粒を主越含む	良好	内外:ナデ	馬形埴輪たてがみ部か
		第25図 6	図版12	不明	厚:1.0~1.1	内:にぶい赤褐 外:明赤褐	3mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	内:指オサエ、ヨコナデ 外:タテ方向のナデ	外面は風化のため調整不 明瞭
トレンチ3	土坑状遺構	第25図 7	図版12	土師皿	高:(2.7) 底:(7.8)	内:浅黄橙 外:灰白	精良	良好	内・外:回転ナデ 底:糸切り	ローリングを受ける





①横隈山古墳遠景（北東上空から）



②横隈山古墳遠景（東上空から）

矢印が横隈山古墳

図版 2



①横隈山古墳全景（南西から）

②後円部墳頂から前方部（南から）



③後円部墳頂埴輪列（北西から）

④ 後円部墳頂埴輪列（北から）





①盗掘坑全景（南から）

②盗掘坑南北トレンチ（南西から）



③北側サブトレンチ土層（北から）

④南側サブトレンチ土層（北から）





①トレンチ1 全景（北から）



②トレンチ1 後円部全景（北から）



③トレンチ1 後円部裾
サブトレンチ土層（北東から）



④トレンチ1 前方部裾
サブトレンチ土層（北東から）



⑤トレンチ1 周溝部（北から）



⑥トレンチ1 周溝端（北西から）



①トレンチ2全景（西から）



②トレンチ2全景（東から）



③トレンチ2後円部裾土層（北から）



④トレンチ2周溝部土層（北から）

図版 6



①トレンチ 3 全景 (南西から)



②トレンチ 3 後円部土層 (東から)



③トレンチ 3 土坑状遺構土層 (東から)



④トレンチ 4 全景 (東から)



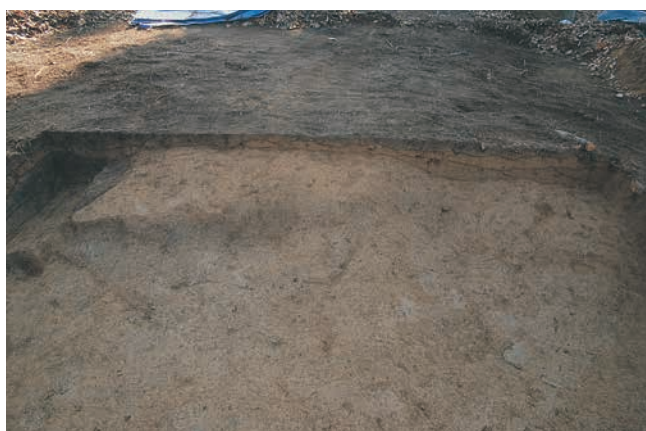
⑤トレンチ 4 土層 (南から)



⑥トレンチ 4 前方部裾土層 (南から)



① トレンチ 5 全景 (北から)



② トレンチ 5 土層 (北から)



③ トレンチ 5 土層 (西から)



④ トレンチ 5 拡張部 (西から)



⑤ トレンチ 5 拡張部 (東から)

図版 8



①トレンチ6全景（北東から）



②トレンチ6拡張部（北西から）



③トレンチ7全景（北東から）



④トレンチ7土層（北西から）



①トレンチ 8 全景 (北西から)



②トレンチ 8 土層 (北から)



③トレンチ 8 延長部全景 (南東から)



④トレンチ 8 延長部土層 (北東から)



⑤トレンチ 8-2 全景 (北西から)



⑥トレンチ 8 拡張部 (南から)

図版 10



①トレンチ 10 全景 (南から)



②トレンチ 10 土層 (南西から)



③トレンチ 10 攪乱土層 (南西から)



④トレンチ 10 周溝部土層 (西から)



出土遺物①

図版 12



盗掘坑



トレンチ 12



土坑状遺構



黒斑



突帯剥離面



突帯断面・裏面



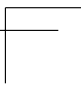
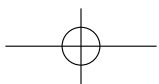
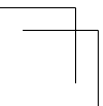
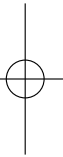
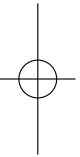
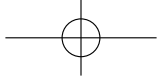
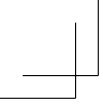
底部工具痕

出土遺物②



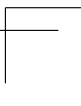
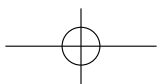
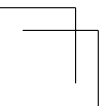
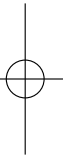
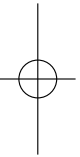
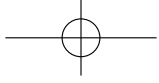
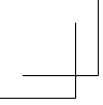






報 告 書 抄 録

ふりがな	よこぐまやまこふん							
書名	横隈山古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第289集							
編著者名	龍孝明							
編集機関	小郡市教育委員会							
所在地	〒838-0198 福岡県小郡市小郡 255-1 TEL0942-72-2111							
発行年月日	2015（平成27）年3月31日							
保管場所	[遺物]・[図版]・[写真] 小郡市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 TEL0942-75-7555							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よこぐまやまこふん 横隈山古墳	おごおりしみくにおか 福岡県小郡市三国が丘 7丁目	40216		33° 26' 00"	130° 33' 54"	2012.07.02 ～ 2012.08.29	1308.5 m ²	重要遺 跡確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
横隈山古墳	古墳	古墳	古墳	須恵器、土師器、埴輪				
要約	全長 31.6m を測る前方後円墳。前方部側では幅 7m の周溝が確認された。 埋葬施設は盗掘を受けており詳細不明。 後円部墳頂には円筒埴輪列が樹立される。							



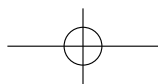
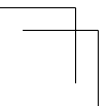
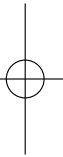
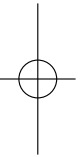
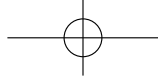
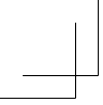
横隈山古墳

小郡市文化財調査報告書 第289集

2015年3月31日

発行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 225 - 1

出版 片山印刷有限会社
小郡市祇園1丁目8-15



横
隈
山
古
墳

小
郡
市
文
化
財
調
査
報
告
書

第
2
8
9
集

2
0
1
5

小
郡
市
教
育
委
員
会

横隈山古墳

—福岡県小郡市三沢所在横隈山古墳の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第289集

2015

小郡市教育委員会